

補 遺

(考古編)

### 補1 田多地引谷墳墓群

所在地 出石町田多地から口小野にかけてには、豊岡市と境をなす東西に延びる小高い丘陵があり、ここからは但馬でもいくつもないような広い平野を望むことができる。

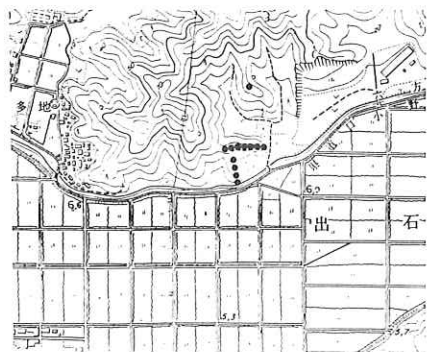


図1 位置図

この山の南麓には、西から安良古墳群、田多地古墳群、田多地小谷古墳群、田多地引谷墳墓群、カヤガ谷古墳群、カヤガ谷墳墓群・横穴、篠谷古墳群がそれぞれ連綿と連なっている。築造時期は弥生時代末ごろから古墳時代の全般におよび、中世にいたる墳墓も一部見つかっている。

1988年(昭和63)このうちの田多地字引谷に位置する田多地引谷墳墓群が発掘調査され、これら古墳群のなかでもっとも先行する時期の遺跡であることが判明した。

#### 調査

確認した墓は全部で41基ある。いずれも一人一人を埋葬するのがやっとの小さな墓壇ばかりで、これらがそれぞれ12のグループに分かれて尾根の上に点在している。各グループの間は尾根に直行して深さ1mほどの浅い堀、または段によって区切られており、これを1号墓から12号墓と呼んでおく。また、11号墓西にはほかと違って一段と大きな掘割が残っている。これは山塊と墓地との境界を示すためのものと思われ、同様のものがカヤガ谷墳墓群でも確認されている。また、12号墓は独立して北の丘陵に離れた場所に位置しているが、一連の墳墓と考えられるためこの墳墓群に含んでおく。

墓の大きさにそれほど大きな差はなく、だいたい長さ2~4m、幅1~2m前後である。一部小さなものは子ども用かと考えられる。ただその構造には違いがあり、組み合わせ式箱式石棺墓・組み合わせ式箱式木棺墓・土坑墓の3種類が混在するという、ほかの遺跡にはあまり見られない特異な構成となっている。また、このうち石棺を用いている墓には人骨がよく残り、9体分が出土した。4号墓第1主体では遺体の枕として利用されていた高杯が互い違いに2つ置かれてあり、2人一緒に葬られたことが確認できる。12号墓は



図2 遺構配置図

かなり削平されていたが、第1・2主体とも土器の転用枕が確認できた。

#### 遺物

##### 珠文鏡

径 7.2cm をはかる銅鏡。5号墓第1主体から出土。

頭部すぐ左の位置に副葬され、朱が施されていた。

##### 銅鏃

長さ 5.6cm、幅 1.8cm。秀品である。10号墓第2主体の人骨の頭部すぐ右の位置に副葬されていた。

##### 五銖銭

径 2.6cm、口径 1.0cm、厚さ 1mm。7号墓第3主体の頭部すぐ左から出土した。中国後漢代のものとして推定される。日本では同様の時期の中国の貨幣は現在までに27例が知られており、五銖銭の出土は今回で7例目となる。

##### 鉄製品

鉞3・劍2・刀子2・鉄斧1・鉄鎌1などがあり、6号墓第3主体から出土した長さ 3.4cm、太さ約 1mm の針金状のものは釣針の可能性はある。

##### ガラス勾玉

全長 2.2cm。ブルーにややグリーンがかかった色をしている。ガラス小玉51

## 補1 田多地引谷墳墓群

点・碧玉製管玉14点と同時に出土した。右手首のあたりから一括して出土しており、プレスレットと考えている。

ガラス小玉

全部で60点。径約 1mm から 5mm 程度のものまである。ブルー。

碧玉製管玉

27点出土。11号墓第2主体では頭の位置に10点まとめて置かれていた。

人骨

9体分検出されており、これらはすべて石棺墓から出土したものである。頭蓋骨から足の部分に至るまで良く残り、年齢性別などが分かっている。

土器

出土した土器は少量で、復元して形の分かるものは20数点ほどである。ほとんどは主体部の直上に置かれていたもので、埋葬の際の祭祀にかかるものと考えている。カメ・壺・水差しのほか祭祀用に小型に作られたもの、朱が塗られたものもあった。いずれも弥生時代末から古墳時代前半ごろのものである。

まとめ

この遺跡は山陰地方に特有の馬の背のような狭い尾根の上に、小さなテラスをいくつか造り、その中に小さな墓を並べ、全体として一つの墳墓群を形成している。ただこの遺跡はほかとは違って、前述したようにいくつかの棺形態が混在するという特徴を持つ。この丘陵ではこの遺跡のほか2つの似たタイプの墳墓群の発掘調査が実施されているが、田多地古墳群でも同様に木棺墓や石棺墓等が混在する(『出石町史第3巻』を参照)。それに対してすぐ東に位置するカヤガ谷墳墓群ではほぼ木棺墓に統一されている。今後この特異な形態は検討する必要がある。

また遺物の点からは五銖銭の出土は特筆すべきことであろう。日本での出土例ではその多くが九州から瀬戸内沿岸に集中しており、日本海側での発見例はまだまだ少ない。今後但馬の古代を考える上で、興味深い課題を提供してくれた遺跡である。



表 1 田多地引谷墳墓群墓城一覽表

墓	主体	棺構造	墓壙・全長×幅×深さ (cm)	被葬者年齢	性別	推定身長	副葬品
1	1	箱式木棺	270×100×70	熟年後半～老年	女		棺内に朱を塗布
	2	箱式石棺	220×90×100				
	3	箱式木棺	140×80×40				
	4	箱式木棺	270×110×60				
	5	箱式木棺	220×100×80				
	6	箱式木棺	300×110×100				
2	1	箱式木棺	350×220×120				
	2	箱式木棺	290×180×80				
	3	箱式木棺	170×80×50				
3	1	箱式木棺	240×90×70				
	2	箱式木棺	260×200×90				
	3	箱式木棺	260×110×50				
4	1	箱式木棺	310×300×70				高杯転用枕 2
5	1	箱式石棺	450×220×120	壮年	女		鏡・鉈・ガラス玉類多数
	2	箱式木棺	260×130×100				
	3	箱式木棺	240×100×80				
	4	箱式木棺	320×140×70				
6	1	箱式木棺	360×180×90	壮年	女?		刀子・ガラス小玉 8・針? 管玉 3・白玉 8
	2	箱式石棺	160×80×70				
	3	箱式石棺	320×160×130				
7	1	土坑	220×80×60	壮年後半 壮年前半	男 男	165cm	水差型土器 五銖銭・短剣・鉈 鉄斧・鉈・水差し型土器 把手付き甕型土器
	2	箱式木棺	230×110×50				
	3	箱式石棺	260×180×110				
	4	箱式石棺	270×150×90				
	5	箱式木棺?	230×70×25	老年	女	150cm	
	6	箱式石棺	280×230×100				
	7	不明					
8	1	箱式石棺	320×240×80	熟年後半～老年	女	149cm	
	2	箱式木棺	210×120×110				
9	1	箱式木棺	180×130×40	熟年	女		
	2	箱式石棺	240×180×120				
	3	土坑	280×100×30				
10	1	箱式木棺	240×180×60	壮年後半	男?		
	2	箱式石棺	220×170×90				
11	1	箱式木棺	230×80×50				
	2	土坑	200×60×50				
	3	土坑	240×130×40				
	4	箱式木棺	260×80×50				
	5	土坑	200×70×50				

補1 田多地引谷墳墓群

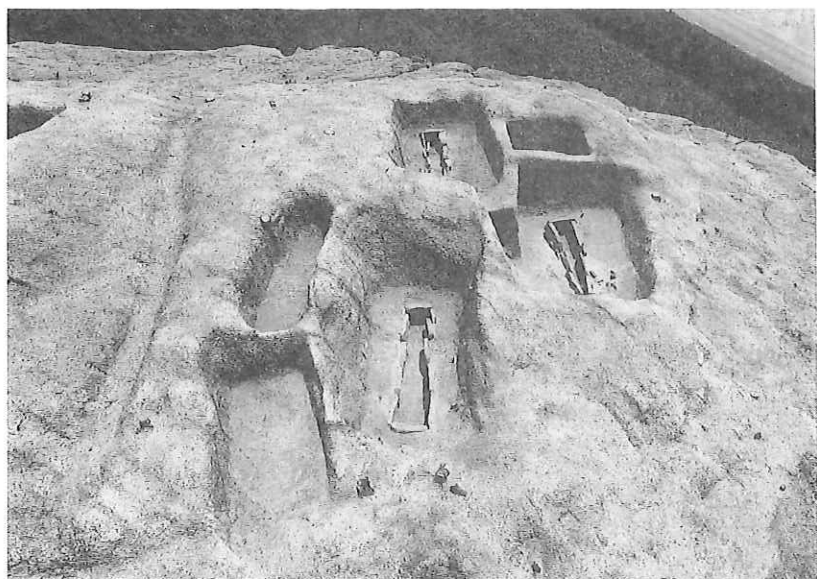


写真 1 (上)田多地引谷墳墓群全景<南東から> (下)7号墓<西から>



写真 2 (左上) 7号墓第3主体人骨出土状況 (右上) 7号墓第3主体蓋石  
(左下) 7号墓第3主体出土五銖銭 (右下) 5号墓第1主体出土珠文鏡

## 補 2 カヤガ谷墳墓群

所在地 出石郡出石町袴狭字カヤガ谷に所在する。カヤガ谷古墳群のすぐ東に位置し、同様に南に面する小高い尾根上に造られている。更に東にはカヤガ谷横穴が続く。1992年(平成4)兵庫県教育委員会と出石町教育委員会とによって発掘調査が実施され、



図 3 位置 図

3基の墳墓群が確認された。おそらく第1・2主体がほぼ同時に造られ、その後4・5→3・6・7と順次埋葬されたのであろう。第2主体はよく加工された板状の石材を用いていた。棺内への流入土も少なく、良好な状態で石枕をした2体の人骨が検出された。また、棺内側には朱が施されていた。ほぼ4世紀ごろの築造と考えられる。

墳丘山側に残る掘割は深さもあり、底もきちんと面を造るなど丁寧な仕事となされていた。丘陵と1～3号墓との墓域とを区切る施設と思われる。

カヤガ谷横穴が続く。1992年(平成4)兵庫県教育委員会と出石町教育委員会とによって発掘調査が実施され、3基の墳墓群が確認された。

### 1号墓

3基のうちで一番高いところに位置している。標高約30m。4mを越える割竹型木棺を中心に7つの主体部が墳丘上に確認された。

おそらく第1・2主体がほぼ同時に

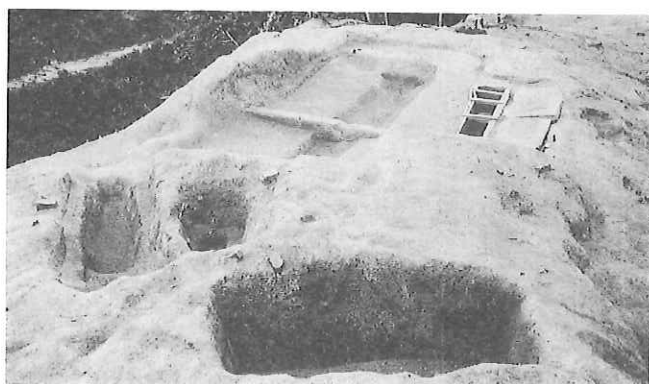


写真 3 1号墓全景(北から)

## 2号墓

中心となる埋葬主体を持たず、11の小さな墓壙が点在している。第11主体からの150点ものガラス小玉の出土が注目される。土坑墓が2つあるが他はすべて箱式木棺墓である。

## 3号墓

中央で2つのグループに分かれる。第1・2主体はやや離れているが一応これに含んでおく。すべて木棺墓で形成されている。第6・9主体からは土師器甕を転用した土器枕を検出した。第6主体のものは二重口縁を持つ山陰系の土器で、その口縁の一部を打ち欠いて枕とし、第9主体のものは畿内系の布留式甕を利用していた。

このほか中世の遺構が2号墓と3号墓の間で見つかっている。一方には地山を円形に掘りくぼめ、越前焼の壺が一つ納められていた。壺から内容物は検出されなかった。もう一方も同様の土坑で鉄刀が出土している。

## まとめ

遺構は3基の例外を除けばすべて木棺墓により構成されている。これは同じ丘陵の西に位置する田多地引谷墳墓群や田多地古墳群がいくつかの形態が混在しているのに比べて非常に対照的である。今後但馬周辺の事例とも合わせ検討すべきであろう。

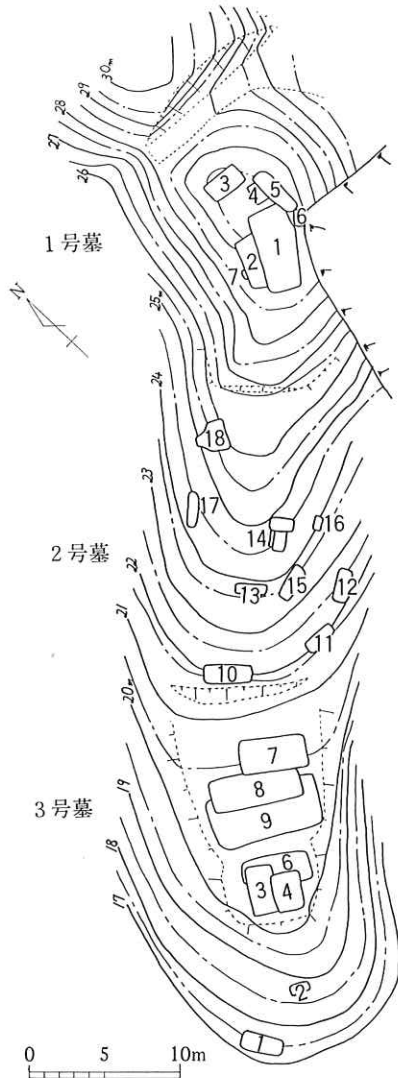


図4 遺構配置図

補2 カヤガ谷墳墓群

表2 カヤガ谷墳墓群墓壇一覽表

単位 (cm)

墓	主体	棺形態	墓壇・全長×幅	棺痕・長さ×幅	出土遺物	
1	1	割竹型木棺	560×280	420×60	刀子	
	2	箱式石棺	360×160以上	160×30	人骨2体・石枕・鈿・ガラス小玉1	
	3	箱式木棺	250×140	170×50		
	4	土坑墓	170×110	60×25		
	5	土坑墓	310×100	190×50		
	6	不明	160×不明	不明		
	7	土器棺	70×40	50×30		壺2個を利用
2	1	箱式木棺	271×103	223×52	鉄製刀子1・供献土器	
	2	箱式木棺	105×67	83×23		
	3	箱式木棺	305×152	223×48		
	4	箱式木棺	224×191	161×54	土器枕	
	6	箱式木棺	423×176	211以上×81		
	7	割竹型木棺	457×208	227×56		
	8	割竹型木棺	554×80	412×51		
	9	箱式木棺	719×109	622×61		鉄刀?1・土器枕
	3	10	箱式木棺	345×149		226×69
11		箱式木棺	252×131	194×58	ガラス小玉150点・供献土器	
12		箱式木棺	208×120	188×60		
13		土坑墓	216×62	—		
14-1		箱式木棺	168以上×71	103×39	供献土器	
-2		箱式木棺	122×70	74×35	供献土器	
-3		箱式木棺	108以上×65以上	72×34		
15		箱式木棺	238×108	188×56	供献土器	
16		箱式木棺	91×47	70×29	供献土器	
17		土坑墓	140×60	—		
18		箱式木棺?	300×210	不明×60		

## 補 3 入佐山 3号墳

所在地 入佐山は出石の城下町を一望できる小高い山で、出石町下谷及び魚屋に所在している。標高は約 90m で、頂上部には 3 基の古墳と小さな木棺直葬墓が点在しており、1つの古墳群を形成している。先にこの古墳群については確認調査が実施され、弥生時代後期にさかのぼる墳墓から土器と共に鉄鏃 3点と計 500個にのぼる ガラス小玉が出土している(『出石町史第3巻』参照)。

## 調査

1988年(昭和63)、第2次の調査としてこのうちの3号墳が発掘調査された。



図 5 位置図

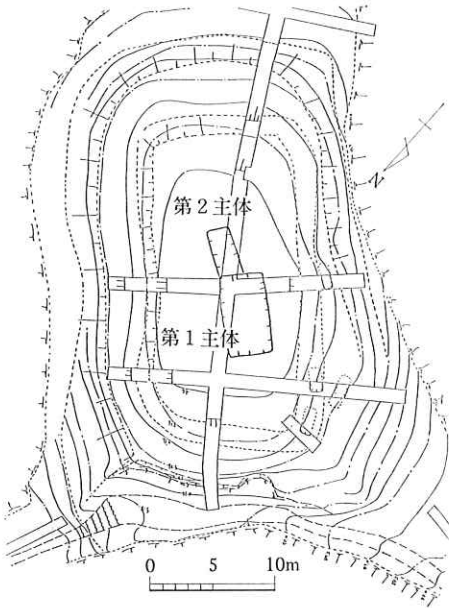


図 6 墳丘平面図

3号墳は尾根の最も高い場所に位置し、山を削り出して造られている。36×23m の方形で高さ約 3.5m。この長方形の形は山陰地方に特徴的な在地型のタイプである。トレンチによる調査の結果、墳頂部に2つの墓壇のあることが判明した。北東側斜面にはテラス状のものが巡っているが、古墳にともなうものかどうかは不明である。調査区を広げて表土を除去してみたところ、この2つの墓壇は一部が重なっており、小さな墓壇がまず造られ、その後その一部を壊して大きな墓壇が造られていることが分かった。

第1主体

2段掘りになっており、上段の掘り方は 6.4m×3.6m を、下段は 5.6m×1.3m をはかる。深さは 1.45m。下段部分に組み合わせ式箱型木棺があったようで、大きさは 4.8m×0.8m と細長く、高さは 0.3m ほどであったと思われる。

棺内にはほぼ全面に赤色の顔料が見られ、遺体の頭の位置と考えられる部分には小さな川原石を数個置き枕としていた。近くにはミニチュアの鉄斧と鉄鎌が置かれていた。また、体の右側に当たる位置には四獣鏡と太刀が、左側には割れた状況で副葬された方銘四獣鏡と刀・剣・鈍が置かれていた。更に足もとには鉄鍬が16点と槍が置かれていた。また、棺のすぐ左にも鉄剣が副葬されていた。

第2主体

これも2段掘りになっているが、非常に浅く深さは約 0.3m である。一部第1主体によって壊されているため不明だが、掘り片は 3.8m 以上×1.9m で、棺は 3.0m×0.8m の木棺直葬と考えられる。棺内からガラス製の管玉1点が出土した。

第1主体はこの古墳の中心となる墓壙であるがその位置は古墳の中央ではなく、第2主体を意識しており、これら2つはほぼ同時に埋葬されたと推測される。3号墳の築造時期については

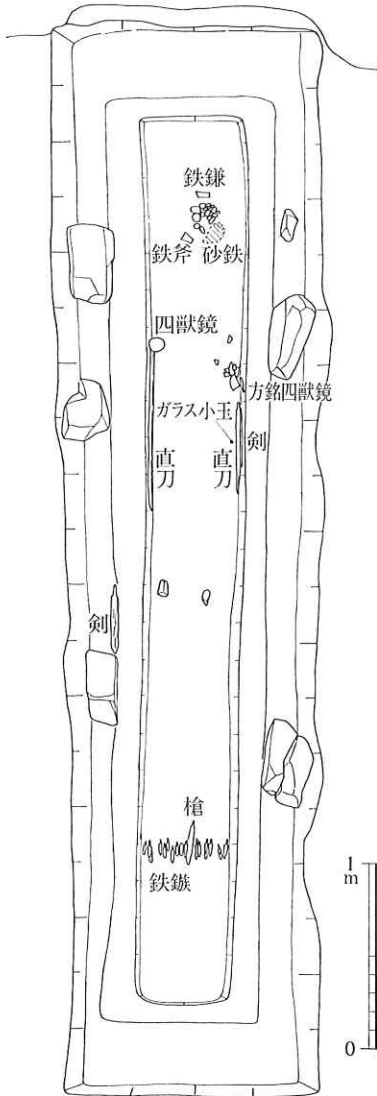


図7 第1主体遺物出土状況





図8 方銘四獸鏡

明確に判断できるものはないが、その副葬品の内容から4世紀の後半ごろと考えられる。

遺物

方銘四獸鏡

径 12.3cm。品質は良く、細かい文様まで鮮明に残っている。文様内には「君宜高官」の4文字が十字に配され、外区には菱雲文と呼ばれる文様が巡っている。「君宜高官」は「君、高官になるに宜(よろ)し」と読める。この鏡は文様の状態やその技術の高さからみて中国で製作されたものと考えられ、その時期は後漢の終わりごろ、2世紀の第4四半期ごろと推定される(口絵1)。

四獸鏡

### 補3 入佐山3号墳

径 8.5cm の仿製鏡である。獣の文様はかなり抽象化されている。

#### 直刀

2本とも表面に木質が残っており、木の鞘(さや)に納められていたことが分かる。長さ 88.5cm および 45.0cm。長いほうは把が一部残っていた。

#### 剣

2本あり、それぞれ35.5cm、34cmをはかる。前者は棺外から出土しており、特に鞘がよく残っていた。

槍 長さ 20cm で、鉄鏃に混じって出土した。

#### 鉄鏃

合計16点あり、定角式10点と柳葉式6点とに分かれる。長さはほぼ8cm前後で、埋葬時には矢に取り付けられた状態であったと思われる、茎の部分に木の皮が巻かれたまま残っているものがある。

鈍 長さ 17.5cm をはかる。

鉄斧 6.5cm と小型のものである。

鉄鎌 10.5cm をはかり、少し柄の部分に木質が残っている。

ガラス小玉 薄いブルーをしており、径約 5mm。

#### 砂鉄

頭部近くで約 150g が採集された。鉄生産にかかるものとして副葬されたものなのか、現在類例もなく不明である。

このほかこれら入佐山古墳群をつなぐ尾根の上にもトレンチを入れた結果、2号墳が径15mの円墳であることと、その他この山全体には少なくとも50以上の小さな木棺直葬墓のあることが分かった。この木棺墓は表土から採集した土器片より、弥生時代後期から古墳時代前期に至る墳墓であろうと考えている。

#### まとめ

墳丘の規模などからある程度の副葬品は予想されたが、方銘四獣鏡は全国でも同様のものの出土例はなく、興味深い発見であった。また、砂鉄の古墳への副葬は類例がなく、その成分分析など今後の研究が必要である。

入佐山1号墳をはじめ付近には但馬最大の円墳茶臼山古墳や鶏塚などがあり、一つの古墳群を形成している。そして、このうち最も最初に造られたのがこの入佐山3号墳であり、その規模、副葬品の質・量はこの地域に古墳時代の到来を示すものとして評価できよう。

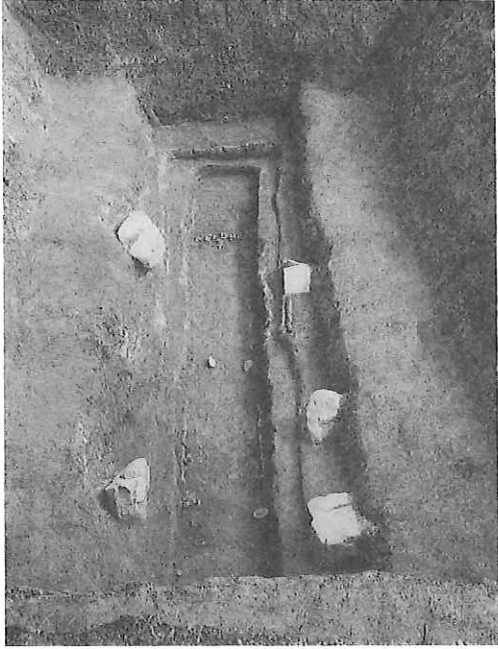


写真 4 (上)第1主体 (下)四獣鏡

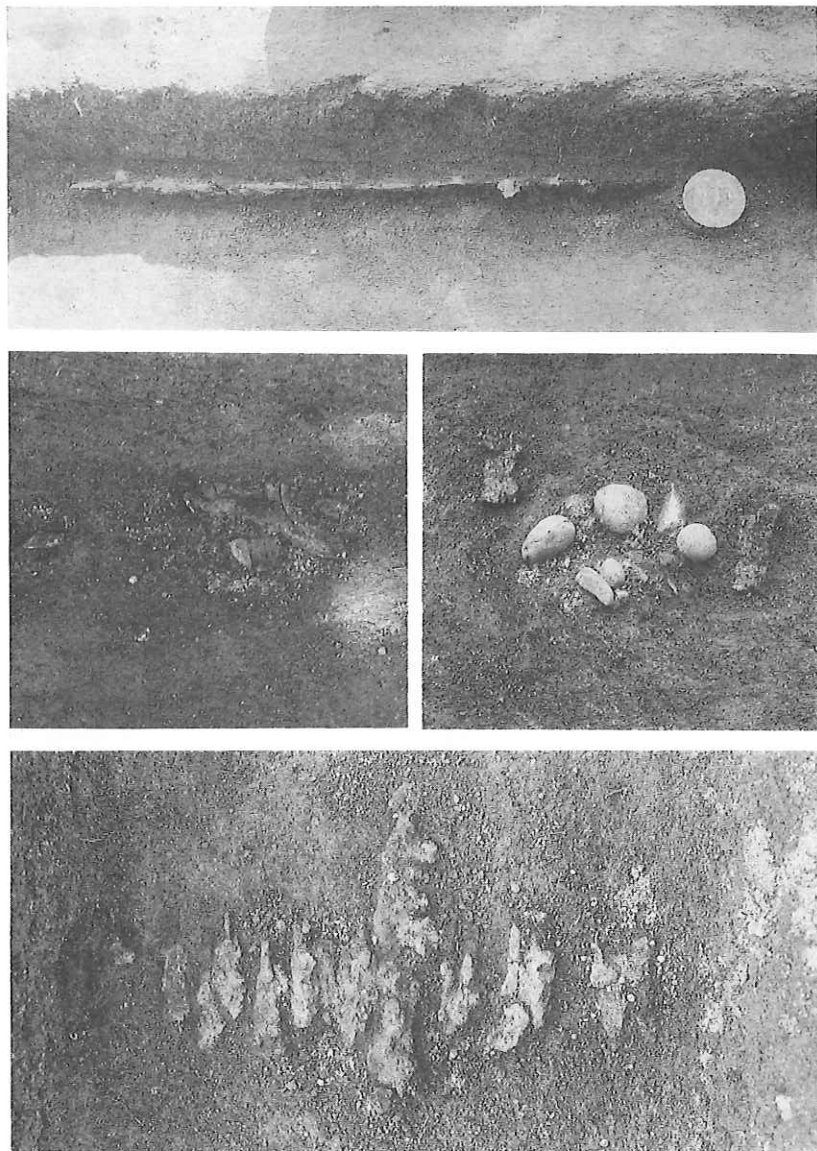


写真5 第1主体遺物出土状況 (上)直刀、四獸鏡 (中左)方銘四獸鏡  
(中右)枕石、鉄斧、鉄鎌 (下)鉄鎌、鉄槍

## 補 4 カヤガ谷古墳群

所在地 出石郡出石町袴狭字カヤガ谷に所在する。カヤガ谷と呼ばれる谷を囲むような丘陵上に位置する古墳群で4基から成っている。南には小野川を挟んでほ場が広がり、眼下すぐ西には北流する出石川が一望できる。1990年(平成2)に出石町教育委員会によってこのうちの1～3号墳が発掘調査された。

## 1号墳

丘陵上の標高18mのところの造られた円墳で、径13m、高さ3mをはかる。墳丘は残念なことに後世の破壊を受け、石室も天井石を

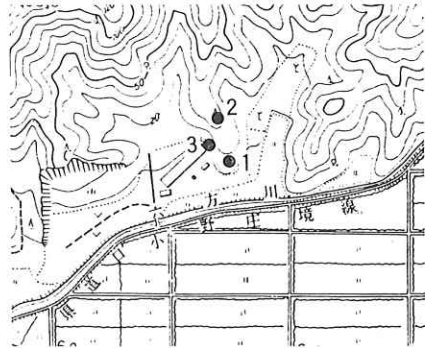


図9 位置図

含む上半分が残っていない。横穴式石室を主体部としているが、山側に開口する特異な構造となっており、同じく山側に周濠が残る。玄室は床面で3.8m×1.8mをはかり、玄室と羨道との間のいわゆる玄門の位置に、玄室側が一段下がる高さ60cmの段が付く。段の部分には石を並べこれを補強し、これ



写真6 1号墳全景

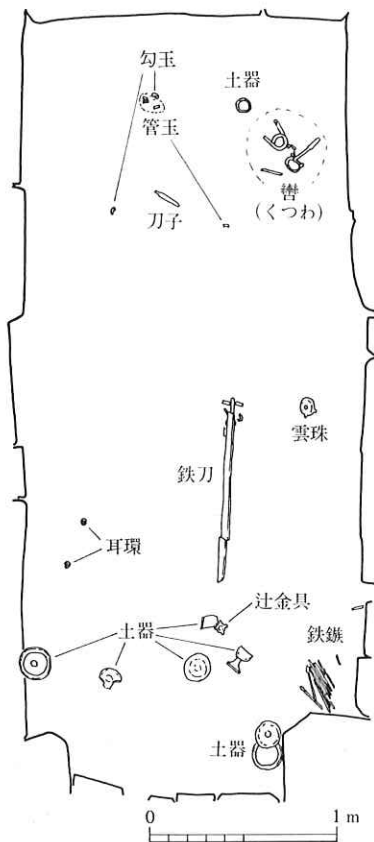


図10 1号墳玄室内遺物出土状況

より入口側に人頭大の閉塞石が積まれていた。これを含む羨道は短く、長さ2.4m、幅1.2mである。石室の入口付近及び前庭部からは墓前祭祀にともなう土器が出土した。杯・高杯・壺・甕などがあり、横瓶が壊れた状態で検出された。石室内には鉄刀とその鏢、鉄鏃、轡・雲珠・辻金具等の馬具、耳環、玉、須恵器等が置かれていた。

これ以外に外部施設として墳丘裾を巡る人頭大の石列が確認された。全体の3分の1程度が残っており、またこれより内側に3個の巨石が奥壁の裏ごめのように置かれていた。築造時期は6世紀後半ごろと推定している。

#### 2号墳

1号墳より北に40m離れた尾根上、標高約25mに2号墳は位置している。明確な区切りがなく形状は分かりにくいですが、山側に幅2m程度の堀が残っており、これから

推定して径約16m程度の円墳だと考えられる。盛土は墳丘中央部でわずかに30cm程度が確認されただけで、他は15cm程度の表土の下はすぐに地山である。

主体部は木棺直葬で中央に1基確認された。盛土を切って掘り込まれており、墓壇検出面で鉄鏃が7点出土した。墓壇は東西方向を向き、大きさは3.2m×1.1m、深さ0.6mであった。副葬品は鉄刀が1点棺の北側で確認された。築造時期は不明だが、鉄鏃や表土から採集された須恵器甕の破片から6世紀前半ごろと推定される。

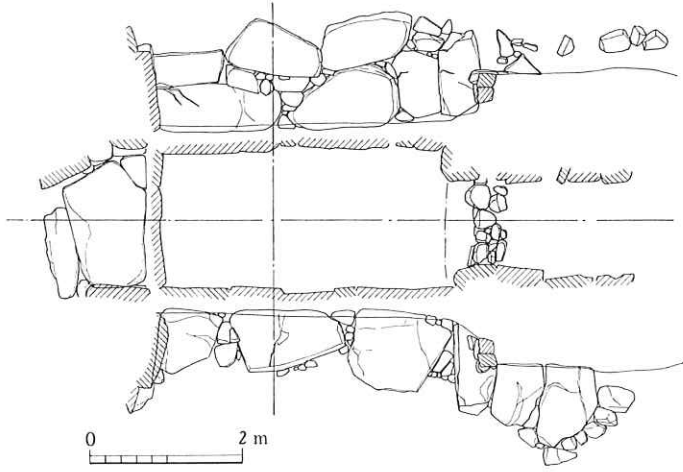


图11 1号填石室图

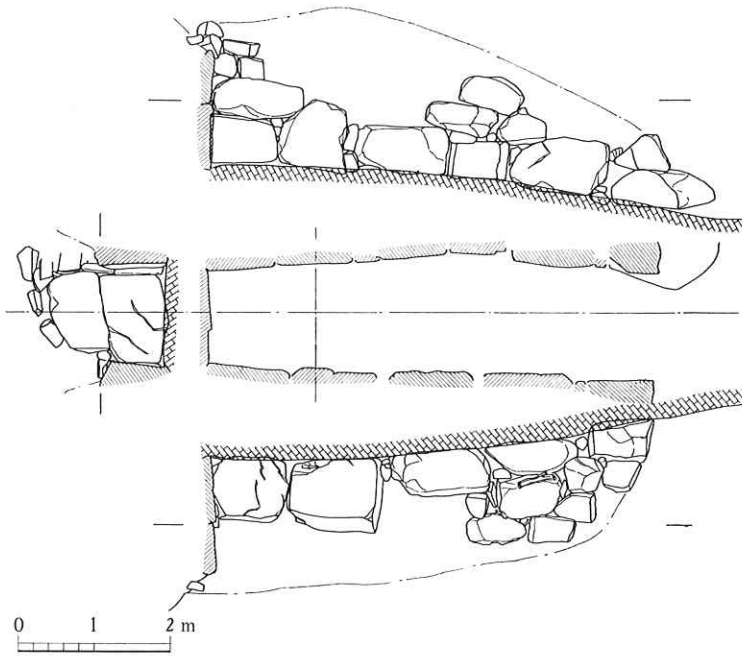


图12 3号填石室图

#### 補4 カヤガ谷古墳群

##### 3号墳

1・2号墳とは違って西の尾根裾に築造された円墳で、径 1.1m。横穴式石室を主体部に持ち、山裾側に開口している。1号墳と同様に天井石はすでになく、石室の上半分の石材がもち去られている。また、後世の溝によって墳丘の一部が壊されている。

石室は無袖式で、全長 5.8m、幅約 1.4m。中央がわずかに膨らんでいる。玄室と羨道を区切る閉塞石のようなものは残っておらず、かなり荒らされたようである。ただ奥壁4mあたりから入口に向かって底面が約 50cm 下がっており、ここが玄門であったと考えている。

副葬品はほとんど残っておらず、鉄製品少量と管玉など玉類・土師器杯・須恵器杯などが出土したのみである。前庭部は後世の溝が横切られて壊されているものの、周濠から須恵器甕の破片がまとまって出土した。築造時期は1号墳のすぐ後あたりの7世紀初頭ごろと推測している。

##### 遺物

###### 1号墳

###### 鉄刀

長さ 105cm もあり、太刀と呼ぶにふさわしく、また約 10cm の鐔（つば）も同時に出土している。

###### 鉄鏃

入口袖部からまとまって14点出土した。ほぼ形状は同じで、長さ 20cm 前後。根元に矢との装着用の木の皮が残っていた。

###### 轡

馬の口にあてがい、手綱を付けて馬を御するのに用いるもの。面繫へつなぐ金具だけは金銅装となっていた。

###### 辻金具

同じく馬具の飾り金具で2点出土している。十字に皮のベルトをつなぐために使うもので、これも金銅装がされている。

###### 雲珠

尻繫につける宝珠の形をした飾り金具。同じく金銅装となっている。

刀子 長さ 16cm のものと 12cm のものの2点出土している。

耳環 並んで2点出土した。銅製で金銅装は見られない。



勾玉 2点あり、石材はメノウ。

管玉 4点出土しており、璧玉製。

土器

石室内で7点、入口付近から20点以上の土器が出土している。高杯・杯・壺・甕・台付椀・横瓶などがある。

2号墳

鉄刀 長さ71cmをはかり、一部に木製の鞘(さや)が残っている。

鉄鏃 7点出土しており、形状は1号墳のものとはほぼ同じである。

土器 須恵器甕の破片が1点採集されている。

3号墳

刀子 2点あるが、いずれも破片である。

不明鉄製品 環状をした金具の一部。

玉類 メノウの勾玉2点と碧玉製の管玉1点。

土器

土師器の杯1点が奥壁隅からと、入口あたりから須恵器杯が3点まとめて出土した。また、周濠から高さ40cmほどの甕の破片がまとめて出土している。

まとめ

特徴的な事柄を2点あげておく。まず一つは1号墳からの馬具の出土である。但馬ではこれまでに馬具の出土は28例が知られているが、金銅装のものは村岡町の文堂古墳をはじめ5例ほどで、出石町ではもちろん初めての出土である。この巨石を用いた石室から考えてもかなりの豪族の墓と考えられる。

もう一つは1号墳の特異な石室の構造である。一般に横穴式石室は尾根の上に造る場合、その裾側に入口を設けるのが通常であるのに対して、この場合山側に開口しており、また玄室より羨道が高いといった構造になっている。これはいわゆる堅穴系横口式石室と呼んでいるものの影響を受けたと思われる。堅穴系横口式石室は近くでは鳥取県にその類例があり、但馬でもこれまでに数例が知られている。特にここから西へ3Kmの大師山古墳群は、その大部分にこの石室が採用されている特殊な古墳群で、この地域との密接なかわりが考えられる。

補4 カヤガ谷古墳群

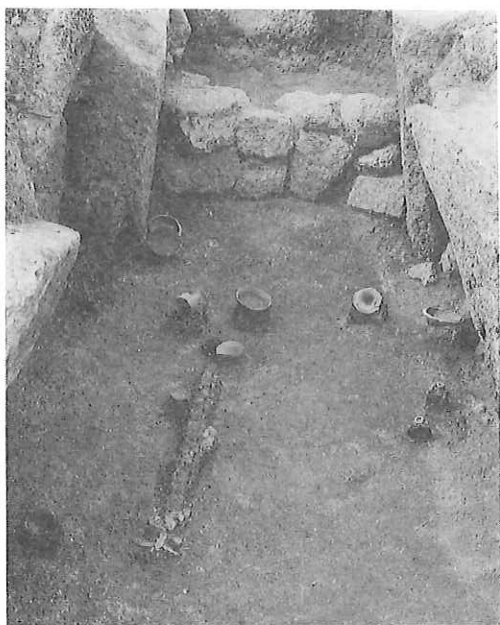


写真7 (上) 1号墳石室 (下) 同石室内遺物出土状況

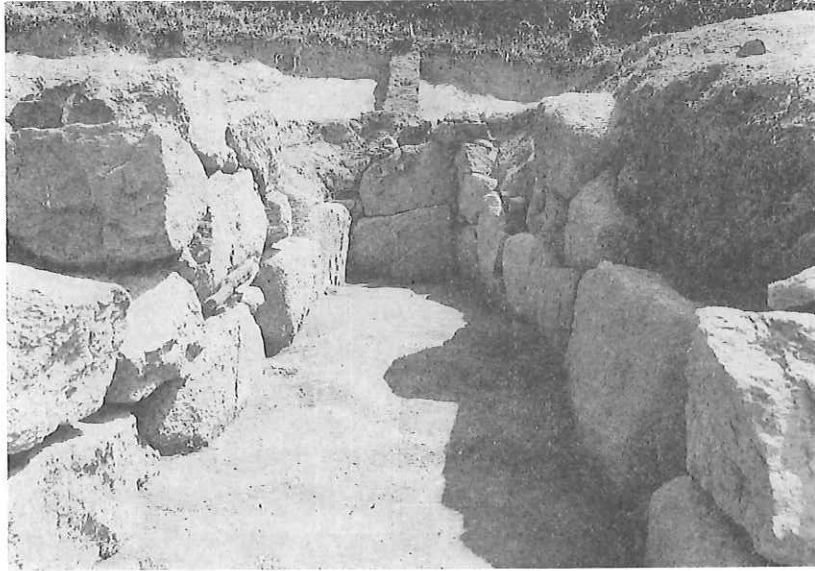


写真 8 (上) 2号墳全景 (下) 3号墳石室

### 補 5 篠谷 2 号墳

所在地 出石町口小野に豊岡市の長谷に抜ける小さな峠道があり、この谷を篠谷と呼んでいる。この谷沿いに 3 基の古墳が点在しており、一つの古墳群

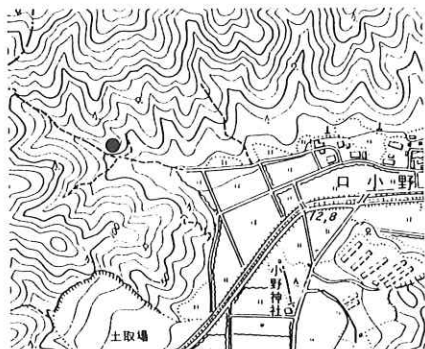


図 13 位置 図

を形成していた。これら古墳群の存在は古くから知られていたようで、古墳の付近は「塚ガ谷」とも呼ばれている。1987年(昭和62)このうちの 1 基が広域農道の予定ルートに当たったため、建設に先立ち出石町教育委員会が発掘調査を実施した。

#### 調査

篠谷 2 号墳は標高 40m の谷中央に築造された円墳で、山側に横穴式石室が開口している。墳丘の大きさは径約 15m で高さ約 2.5m。頂部にはすでに天井石が一部露出していた。墳丘内には外護列石が 2 重に施され、山側には幅約 2m の周濠が確認された。

石室は片袖式の横穴式石室で、玄室の天井は巨石 3 個を用い、側石は横長に多少の例外はあるものの 4 段にやや内側に傾けて積んでいる。ただ、地盤が不安定なため全体的に東側に傾いてしまっている。玄室床面から天井までの高さは 160cm、玄室床面の長さ 345cm、幅 190cm をはかる。内部には 1m に及ぶ土砂が流入しており、これを除去する途中、床面から 30cm ほど上で短刀が出土した。更に床面まで掘り下げると刀子 2・鉄鏃 1 の鉄製品、勾玉 6・管玉 2・切子玉 1・ガラス小玉 4 など玉類、杯・高杯・台付き椀等の須恵器が出土した。

羨道は最下段の石組みしか残っておらず、天井石の有無は不明である。床面での長さ 225cm、幅 135cm。玄門近くに人頭大の石を積み上げた閉塞石が検出できた。また、墓前での祭祀に使用されたと考えられる杯・低脚高杯・甕・横瓶等の須恵器が出土した。この中には奈良時代にする長頸壺も確認された。古墳の築造時期は出土した土器からほぼ 6 世紀の後半ごろに位置付けられる。

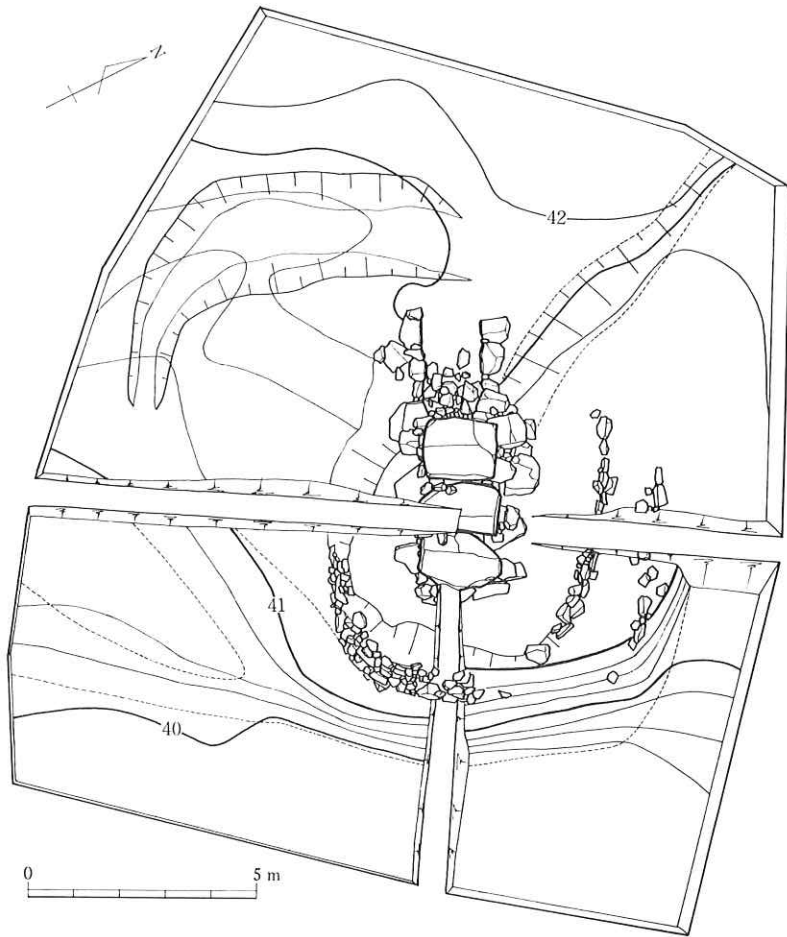


図14 墳丘平面図

すぐ南に位置する1号墳も石室の形態が類似しており、2号墳と前後して築造されたものであろう。これら2つの古墳はそれぞれ石室が山側に開口するという特徴を有している。これはこの古墳群のすぐ西1kmに位置するカヤガ谷1号墳にも見られた形態であり、畿内地方の石室のパターンに堅穴系横口式石室の影響を受けたものとしてとらえることができる。同様のものが但馬各地には有り、この地域の特徴として注意する必要がある。

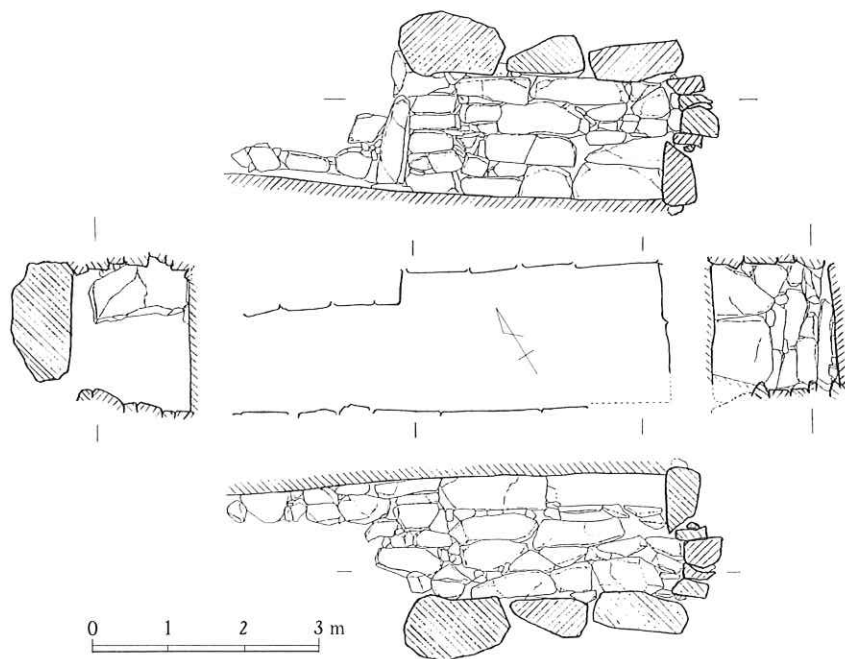


図15 2号墳石室図

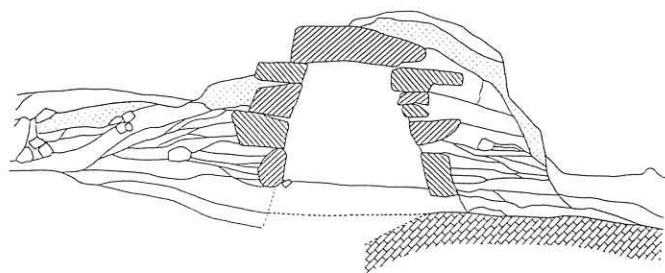


図16 2号墳墳丘断面図

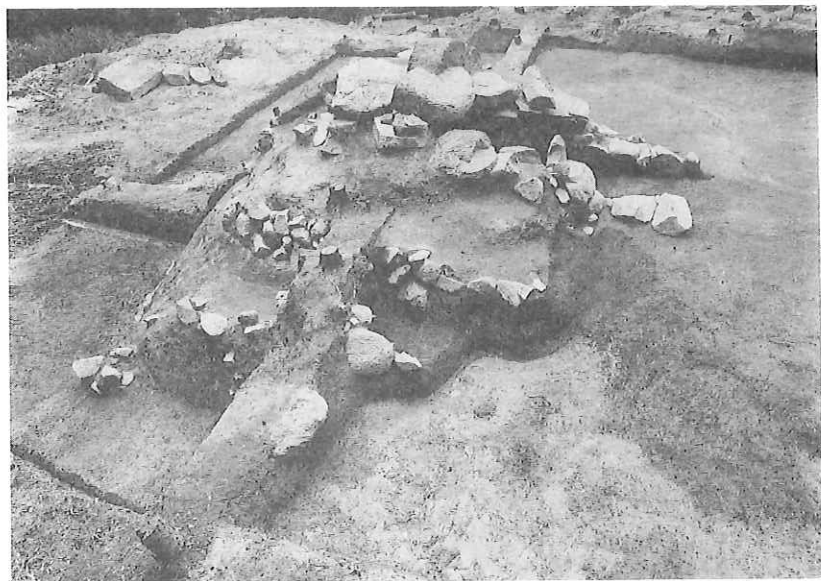


写真 9 (上) 2号墳全景 (下) 石室内部

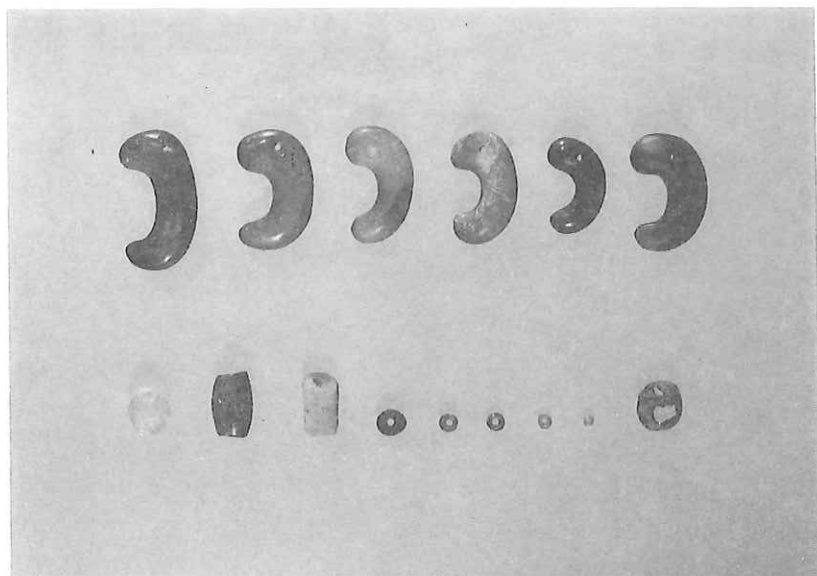


写真 10 (上)出土玉類 (下)出土須恵器



補 6 カヤガ谷横穴

所在地 カヤガ谷古墳群のすぐ東に位置するもので、小野川に突き出した丘陵の先端で工事途中で発見された。崖面に横穴が露出していたため、すぐに6基の横穴が確認できた。

調査

横穴はほぼ同じ高さの位置に築かれており、西側から順に1号・2号と呼んでおく。各横穴の規模は下表の通りである。玄室は平面形態ではなく、段を有する部分で計測している。段によって空間を分けていると考えられるからである。段は1号・4～6号横穴の4基に見られる。0.15～0.25cmの規模のものである。5号横穴では段の部分に副葬品(杯)が置かれていた。



図 17 位置図

奥壁の形状は5・6号横穴が整備された蒲鉾状であるが、ほかはやや崩れた形状となっている。平面形態も5・6号横穴が羽子板状の長いものであるが、他は徐々に細くなりフラスコ状になっている。同様に幅も狭くなっていくようである。

築造は6号から順にほぼ2基ずつ単位として構築されたものと考えられる。5・6号墓が7世紀前半に築かれており、1号横穴の追葬が8世紀前半まで継続して埋葬が行なわれている。

追葬時期にはすぐ東に荒木遺跡が営まれており、居住域と墓域が近接して存在することとなり興味深いものである。

表 3 カヤガ谷横穴遺構及び出土遺物一覧

No	全長(m)	玄室			出土遺物
		長さ(m)	奥壁幅(m)	高さ(m)	
1	(2.45)	2.40	1.80	1.10	須恵器(杯・壺)・土師器
2	(2.40)	2.40	1.10	0.90	須恵器(杯)・装飾太刀
3	(2.40)	2.40	1.05	0.80	須恵器(杯)・太刀
4	(2.40)	2.20	1.75	1.10	須恵器(杯)
5	(6.30)	3.00	2.20	1.90	須恵器(杯・壺)・太刀・鏃
6	(4.10)	2.80	1.80	1.30	須恵器(杯)

備考 ( )の数値は残存値



写真 11 (上)横穴群全景 (下)横穴内遺物出土状況

## 補 7 袴狭遺跡群

出石町袴狭のほ場のほぼ全域と、一部隣接する口小野・田多地・嶋・宮内地区に広がる、奈良から平安時代に至る時期の遺跡群である。袴狭遺跡・砂



図 18 位置図

- 1 砂入遺跡、2 田多地小谷遺跡、3 袴狭遺跡  
4 入佐川遺跡、5 嶋遺跡、6 荒木跡遺

入遺跡・田多地小谷遺跡・入佐川遺跡・嶋遺跡・荒木遺跡がこれに該当する。

遺跡の発見は、1987年(昭和62)11月の建設省の河川改修工事ともなう遺跡確認調査に始まる。当時周辺では古墳時代の土器の採取できる遺跡が2ヶ所確認されているだけであった。ところが調査が進むうち、小野川沿いの袴狭地区の田んぼの下から、人形と呼ばれる木製祭祀具をはじめ多量の木製

品が発見されはじめた。あたりは円山川河口の海岸線から20kmもさかのぼった地域であるにもかかわらず、標高4~8m前後と非常に低く、広く粘質土が堆積している。これが木製品の保存に適していたのだろう。その後、調査が広範囲に進むにつれ祭祀具のほか建物跡なども発見され、現在では3本の河川にまたがって東西1km、南北1kmという驚くような大遺跡が確認されるに至っている。

人形の祭祀とは木製の薄い板を人の形に削り、これらに自分のからだの汚れを移し川に流してしまう儀礼のことで、中国の道教思想にその源があるとされる。日本では奈良時代のころから朝廷を中心に「ほらえ祀」と呼ばれる儀式として盛んに行なわれ、地方でも官衙などの遺跡から発見されることが多い。

この祭祀には人形のほか馬形・刀形・舟形といった形代や斎畜と呼ばれる板状の細い串が同時に使用される。予想されたとおりこれらの遺物も、この後この遺跡群から多量に発見されることとなり、このあたりに全国でも屈指の律令期の祭祀遺跡が存在することが判明することとなった。

遺跡は順次その広がりが確認され、小地区によってそれぞれ遺跡名が付けられている。以下遺跡別に記述する。

### (1) 砂入遺跡

所在地 袴狭字持網に所在する。もっとも最初に確認された遺跡で、兵庫県教育委員会による3次にわたる発掘調査と出石町教育委員会による範囲確認調査が実施されている。遺跡は小野川の左岸に位置し、総延長400mにわたって小野川の奈良・平安時代の遺物包含層が確認され、木製祭祀具を中心とする2万点を超える木製品と少量の土器類が出土した。特に2・3次調査では遺構が大きく上層と下層に分けて確認された。

#### 上層の遺構

東西に走る道を調査している。ピート層やシルト層の広がる低湿地に約100本の杭を2列に並行に打ち込み、その間に木の枝を敷き詰めている。幅約2.5m。木の枝はスギが多く使われ、幾重にも敷かれているところや、これらの上に横木を渡してある箇所もある。道は調査区内で約40mが検出されているが、出石町教育委員会の遺跡確認調査でも約40m東でこれが確認されており、更に東西に延びていくと思われる。また、道の一部で南側に突出部が設けられていた。平面形は台形で接続部で2.2m、先端部で1.8mをはかり、長さは2.0mである。道本体と同じように杭で周囲を決め、木の枝が敷かれていた。かなり大規模な土木工事であったと思われ、また全体的に丁寧な作業を行なっていることは、遺構の性格を示すものかと考えられる。

道路状遺構の上面では数基の土坑が検出されたが、そのうち2つで祭祀遺物の一括資料が検出された。川に流される祭祀遺物であるため、これらが一括してそのままの状態で見つけたことは大きな成果であった。

土坑1は径1.5mの不定形な浅い皿状を呈している。坑内には12点の人形と6点の斎串と1点の曲物が置かれていた。12点の人形はすべて墨で顔を描いており、冠や髭も表現されていた。類似した意匠の墨書による顔面が描かれていることなどからも、一括して土坑内に遺棄されたものと思われる。

土坑2からは13点の人形が出土している。顔は墨書のものや刻みのものと両方の表現が見られる。1点だけ特異なものが含まれており、女性とも子どもとも見えるものであった。

そのほかこの道状遺構からは刀形・馬形といった同様の形代や曲物、折敷などが出土した。容器類は祭祀遺物を載せたものと推定されている。



图 19 調査箇所图

### 下層の遺構

下層の遺構は自然流路を中心に3時期に分けることができる。もっとも古いものは、溝18と呼んでいる流路内に祭祀遺物を流したタイプである。溝の底にぎっしりと堆積しており、祭祀遺物が大半であるが、一部容器類や田下駄・機織り具なども含まれている。祭祀遺物は齋串がもっとも多く、次に人形・馬形の順で、舟形・剣形・刀形・刀子形が数点出土している。特殊なものとして広葉樹で作られた齋串がある。

次は流路にまとめて祭祀遺物を流したと考えられるタイプのもので、溝の湾曲部などの肩に束ねた状態で確認された。旧態をよく残していたところでは、確実に齋串だけの束と人形だけの束とに判別できた。数は限定されていなかったようで特定の数値ではない。また、齋串の種類も場所によって異なっており、ほぼ同種のをそろえたようで大小のものが混在する例は見られない。束ねられた部分には馬形をはじめとした人形以外の形代は出土しておらず、また人形・齋串ともに頭部を下に(川の方)に向けて置かれていた。

最後の段階は、2本の溝に挟まれた部分において、祭祀を行なったままの状態を確認されたタイプのものである。人形が数点であるが、足を突き刺した状態で検出しており、整然としていないが、齋串も明らかに間に存在し、馬形もともなっている。前の2タイプとは違って、この遺跡で祭祀遺物を流すだけでなく、現地で明確に儀式を行なったものと考えられる。

### 遺物

膨大な量の木製品が出土しており、まだ整理できていない。数万点はあると思われる。齋串がその大半を占め、人形・馬形もそれぞれ1000点以上あることは確実である。農具や生活用具に関する木製品も採集されているが、これら木製品に比べ土器は僅かである。このほか木筒や墨書土器も少量ながら出土している。木筒(2)の文面に見える「下里郷」は但馬国太田文の出石郡下里郷和名類聚抄では資母郷に当たり、現在の出石郡但東町中山周辺に比定される。

### まとめ

砂入遺跡は祭祀遺跡として興味深い遺跡である。これまでの中央の官衙関係遺跡と違い、まず純然たる「祓」の遺跡としてとらえることができ、祭祀形態の変化していること、層的に祭祀遺物の組み合わせや編年が分かるなどその成果が今後期待される遺跡である(『日本考古学年報42(1991)』)。

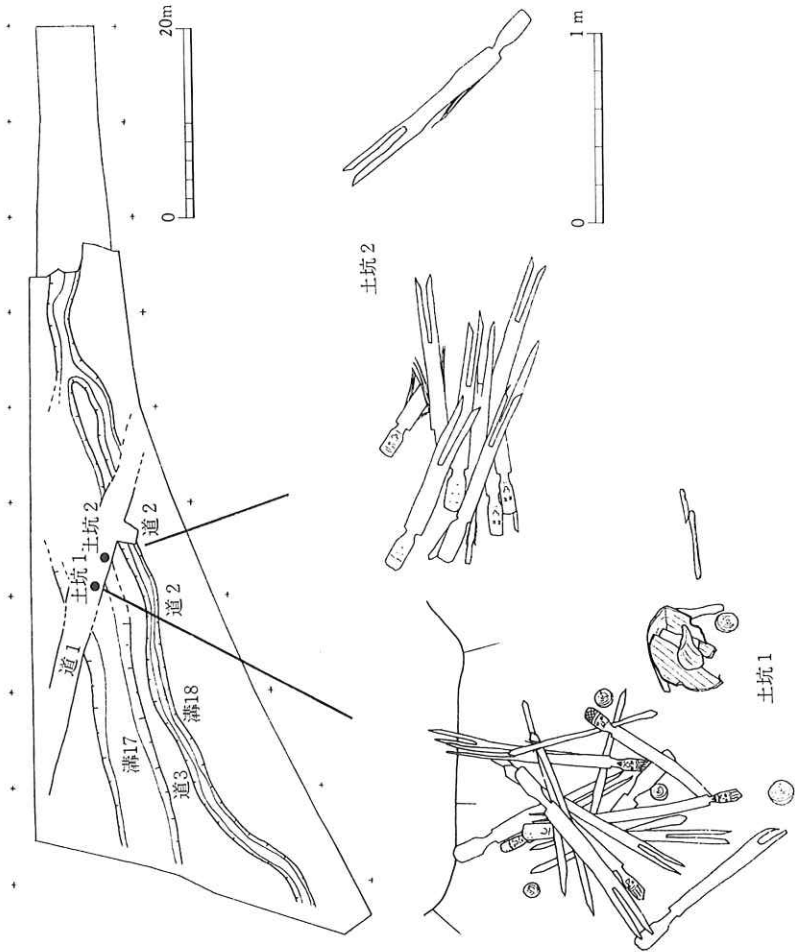


图 20 第 2 次調査遺構図及び人形出土状況

補7 (1) 砂入遺跡

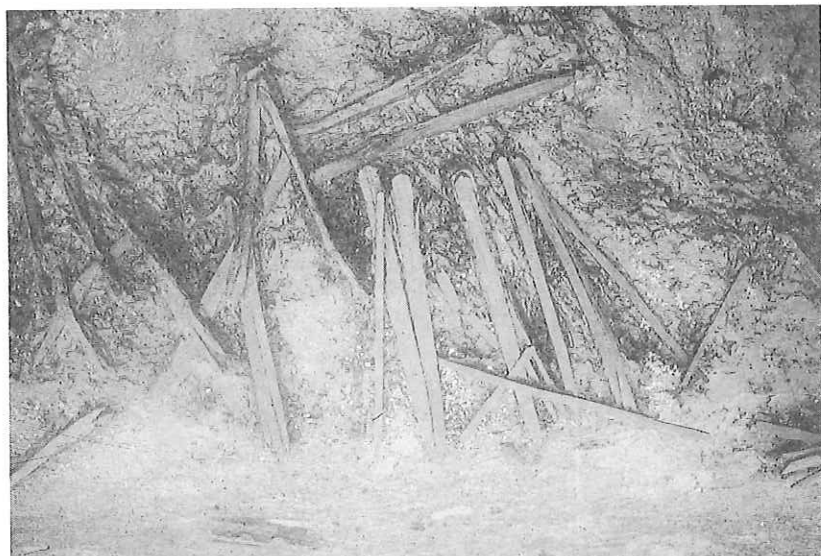
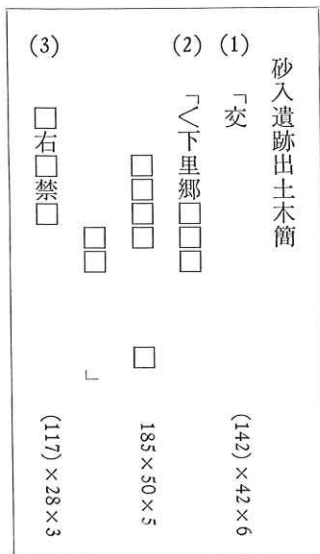


写真 12 木製祭祀具出土状況



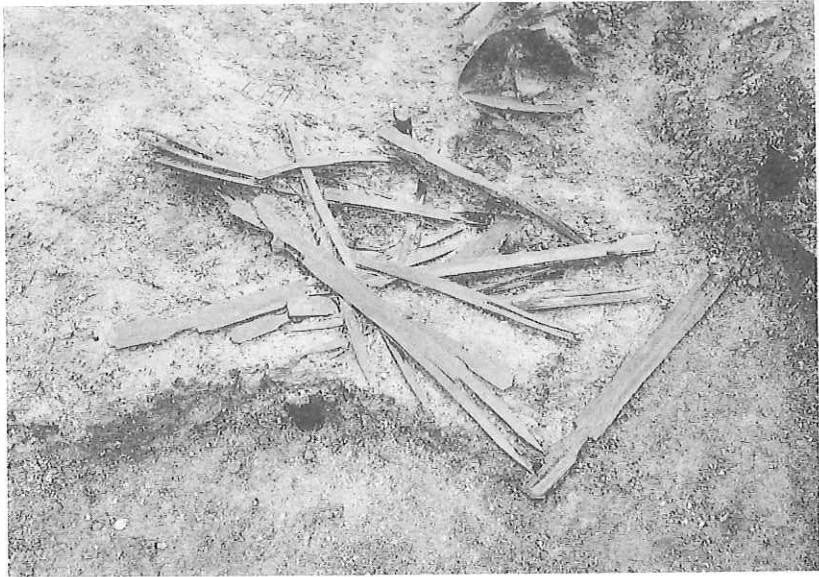
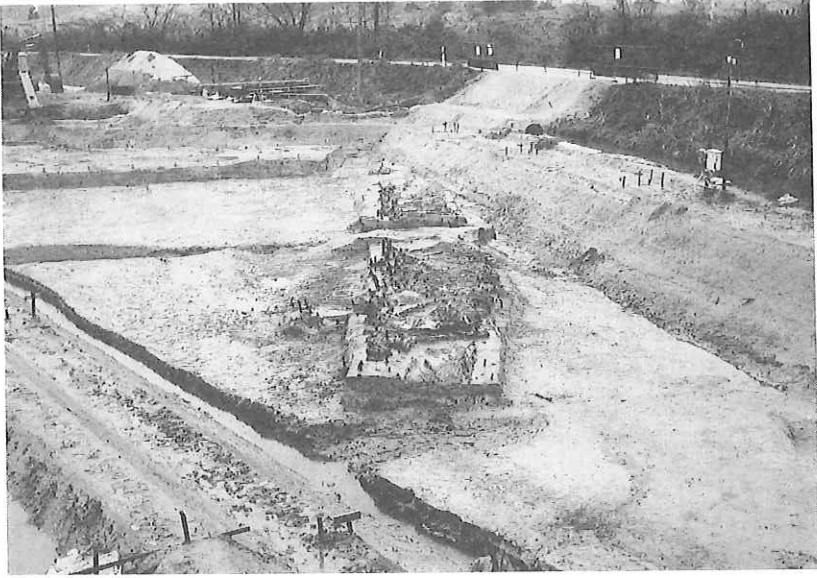


写真 13 (上)道 1 〈南東から〉 (下)土坑 1 人形出土状況

## (2) 田多地小谷遺跡

所在地 田多地字小谷に位置し、小野川沿いの上流には砂入遺跡がある。兵庫県教育委員会の調査により古墳時代前期の土器が多量に出土する遺跡として知られていた(『出石町史第3巻』参照)。1988年(昭和63)、この遺跡の小野川左岸域においては場整備が実施されるにともない、第2次の遺跡確認調査が実施された。

### 調査

トレンチ調査によって小野川沿い約400mにわたり、奈良・平安時代の人形・斎串などの木製祭祀具が出土した。包含層は地表下1mから1.5mの間にあり、シルト質土と砂層が薄く交互に重なり合ったような旧河道と黒灰腐食土とから成っている。遺構は数箇所で見出された簡単な杭打ちによる護岸施設のみである。

祭祀具はこの包含層からばらばらの状態で出土した。砂入遺跡のように現地で投棄されたものというより、そこから流れてきたと表現するにふさわしい状況で採集されている。これより下層には黒褐粘土が堆積しており、一部腐食土となっている。穏やかに堆積したようで腐食土内には葦のような植物の葉がそのまま確認できた。しかし、第1次調査で確認された古墳時代の流路はこの左岸では確認されなかった。

### 遺物

遺物はそのほとんどが木製品であり、人形20・馬形40・刀形1・斎串368等の祭祀具のほか田下駄・曲物・火切臼・櫛・扇・和琴につかわれる琴柱等が出土している。土器はコンテナに3箱程度である。

### まとめ

この遺跡は砂入遺跡とつながる一連の遺跡であり、砂入遺跡で大量に投棄された祭祀具が下流域に流れ出したものと推定される。しかし、第1次調査では奈良時代の井戸も確認されており、その関連性も注目されるであろう。

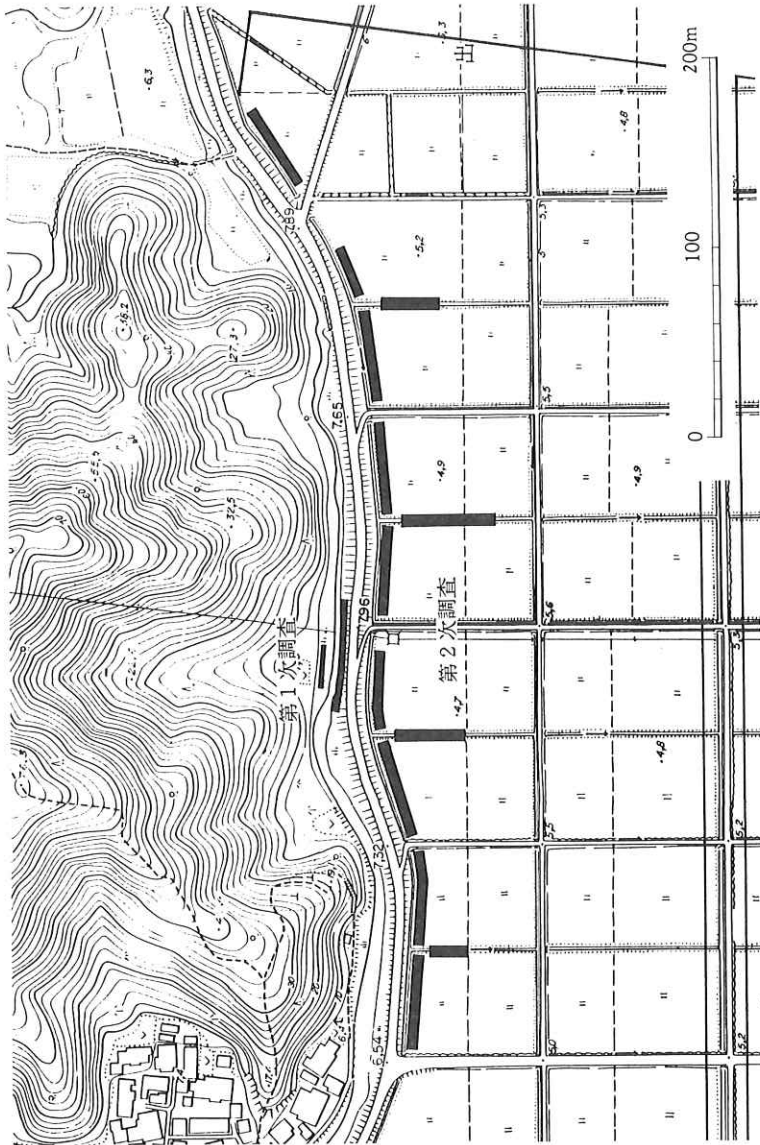


图 21 調查箇所図

### (3) 袴狭遺跡

所在地 小野川からほ場を挟んで南に位置する袴狭川流域で確認された。現在(平成3年)までに兵庫県教育委員会、出石町教育委員会合わせて5次にわたる発掘調査が実施されている。

#### 調 査

〈内田・下坂地区〉 袴狭川上流域の左岸袴狭字内田の調査では、祭祀具以外に銅印・石帯(鉈尾)・木簡・墨書土器など特殊な遺物と共に、明瞭な遺構面と柱を確認した。遺構面は山裾部分では岩盤である花崗岩を削り出しており、谷部では整地していることが判明した。その面で最大径 27cm をはかる大型の柱が確認されたが、調査区が狭く建物の概要まで確認するには至らなかった。

〈衛下・国分寺地区〉 袴狭川上流右岸の旧流路及びオーバーフローしたような土層から多量の祭祀具が出土した。東西に流れている現河川の位置から 100m 近く北に設定したトレンチからも出土しており、遺跡群中央のほ場内にまで遺物包含層は広がっていると思われる。衛下地区あたりではかなり密集して祭祀具の出土する部分があり、この地点から「祓」の道具は投棄されたようである。だが、ほ場全体に実施されたグリッド調査では建物跡の遺構は確認されなかった。

〈大坪・深田地区〉 旧河道に伴う祭祀具の包含層は下流域にも広がっている。ここでは新たに水田跡が見つかっており、この上面からも出土する。水田は上下2層を調査している。一辺が 12m 前後の方形区画をなしており、出土遺物から上層は10世紀、下層水田は9世紀と推定される。このほか深田地区では古墳時代中期ごろの水田跡も検出されている。農耕具など生活にかかる用具の出土が増え、祭祀具には平安時代に入る新しいものが多く見られるようになる。

#### 〈辻垣地区〉

弥生時代の遺物包含層が確認されている。地表下 1m 前後の位置に厚さ 20cm ほどの暗褐粘土の層があり、2世紀(畿内第Ⅱ様式)から4世紀ごろ(古式土師器)までの土器が採集された。ほとんどはⅤ様式のものである。包含層は 50m ほどが確認されており、近くに住居跡等が存在する可能性がある。



図 22 調査箇所図

### 補7 (3) 袴狭遺跡

#### 遺物

##### 銅印

県下で2例目の出土である。重さは43.4gあり「福」と読める。他の銅印と違って確実に時期を押さえられる点は重要である。出石神社に伝わる古印もほぼ同時期のものと思われる(口絵2)。

##### 石帯

主に官人が使用した正装用のベルトで、出土した鉈尾はベルトの末端に当たる装飾品である。材質は滑石で、長さ7.3cmと全国的にみても最大級のものである。また、下流域からこういったベルトの金具も出土している。

##### 木製品

多量にあり現在までに整理できていない。ただ木製祭祀具以外の遺物も多く、田下駄・田舟等の農耕具や機織り具、曲物などの生活用品、和琴、算木といった珍しいものも出土している。

##### 土器

辻垣地区でコンテナに20箱程度の弥生土器が採集されているが、奈良・平安時代のいわゆる祭祀具に対応する時期の土器は墨書土器があるなど、注目すべきものもあるが以外に少量であった。

##### 木筒

袴狭遺跡からは他の遺跡と違って木筒が多く出土している。以下順にその内容を見てみる。

(1)はいわゆる付け札である。表面に見える地名は出石郡に南接する養父郡かとも見えるのだが、残念ながら明確には判読できない。とはいえ出石郡以外から稲積という人物が白米を運んだことが分かる。また、裏面に見える延暦16年(797)の年号は遺跡の年代を考える上で極めて貴重な資料である。

(2)には上段に出石に住む5つの部民の名があり、下段には皇后の宮の税として急ぎ奉れという上から下への命令文が書かれている。当時の皇后宮職にはその財源として、大蔵省からの支給を受ける以外に封戸や出挙稲などの独自の基盤をもっていたようで、「皇后宮税」というのは皇后宮職へ収める出挙の稲のことと推定される。『但馬国正税帳』(737年[天平9])には、「中宮職捉稲使」が但馬に派遣されていることが書かれ、時の中宮・藤原宮子の中宮職の出挙稲が但馬に設けられていたことと関連する可能性もある。出挙稲

は国府の管理する稲であり、実際には郡司等が直接関わったものと考えられるが、この命令がどの段階のものであるかは不明である。

(6)はいわゆる呪符木簡であり、その内容も典型的な単語が並んでいる。鬼の字の上の文字は符籙のようであり判読できない。

(7)・(8)は人形の胸に書かれていたものである。

(14) 内田地区からは同じく「秦磐」と書かれた墨書土器が出土しており、この遺跡と秦部は何等かの関わりがあると推定される。

(16) (7)と同じく人形の胸に書かれていたものである。

(18) 延喜6年(906)民部卿家書吏から出石に所有する田地に対して、なんらかの禁制を伝達した木簡である。禁制を記した木簡としては全国で最古の資料である。文面に見える民部卿は当時中納言藤原有穂がその任に当たっており、彼とかかわる田地がこの地域にあったことが分かる。また、土野郷?(出石町寺坂付近)にいた人物(戸口)がこの田を耕作していたことも読み取れる。

(21) これも同様の禁制を記したものである。中央下半には約3mmの孔が穿たれており、立て札にしていた可能性がある。

(23)・(24)ともに曲物の側面に書かれていたものである。

#### まとめ

袴狭川に沿って見つかったこの遺跡は広範囲に及び、しかも弥生時代から平安時代に至る複合遺跡となっている。しかし、やはり注目されるのは上流域での役所に係るような遺物の出土であろう。特に多量の木簡の出土はこの遺跡群の性格を少しずつではあるが浮かび上がらせており、柱根の見つかった内田地区を始めとする地域になんらかの施設の存在も考えられ、非常に重要な地域として今後対応していく必要がある。

付記 その後平成4年に内田地区で出石町教育委員会によって発掘調査が実施され、礎石建物1棟、掘立柱建物2棟などが見つかった。注目されるものに琵琶の出土がある。腹板と呼ばれる前面にある板で、材質はヒノキ。全長51.2cm・現存幅26.0cm(推定復元幅33.0cm)・厚さ約4mm。3ヶ所に「半月」と呼ばれる響き穴がつくられている。そのほか石帯や銅製の容器、漆塗りの木製下長鎧などが出土している。

また今回この袴狭遺跡群およびカヤガ谷墳墓・カヤガ谷横穴の執筆については、兵庫県教育委員会大平茂・渡辺昇の両氏に大変お世話になった。記してお礼申し上げる。

(11)

「石□□□□  
 □□不可苟所□□<sub>(副カ)</sub>」

□□<sub>(加件カ)</sub> □□<sub>(分カ)</sub>

「鬼」

□ 福□□  
 □ 入里□□

「秦マ大山秦マ弟麻呂秦マ□□<sub>(山カ)</sub>」

□ 衣依言事右 □□□唯□定

□ 大祖父世時□本□

□ 在 □□

(178) × (38) × 6  
 (980) × 60 × 3人形

(16) (17)

「一人當千急々如律令」

「納米 四斗□<sub>(入カ)</sub> 出八□<sub>(升カ)</sub>」

「十□□

173 × 28 × 6

(18)

禁制六条九里甘椎下田式段百姓□□<sub>(叔カ)</sub> □□<sub>(掌カ)</sub> □□<sub>(人カ)</sub> □□ □□ □□  
 右田依□□<sub>(土カ)</sub>野郷出□□<sub>(石カ)</sub>永社戸口 延喜六年四月十三日 民部卿家書吏車持公 執



595 × 106 × 6



袴狹遺跡出土木簡

- (1) 〔<sup>〔養カ〕</sup>〕<sup>〔郡石未カ〕</sup> 郷□方マ公稻積 白米  
 延暦十六年正月廿日  
 (216) × 24 × 3
- (2) 〔<sup>〔下カ〕</sup>〕<sup>〔前マ〕</sup> 出石□□ 六人マ□□ 額田マ□□ 十  
 マ□□ 兵官□□ 日下マ□□ 四  
 〔<sup>〔判カ〕</sup>〕 此皇后宮稅急奉上  
 583 × 49 × 6
- (3) 〔<sup>〔神積カ〕</sup>〕<sup>〔女加々美一面〕</sup> □□  
 176 × (13) × 2
- (4) 〔<sup>〔以カ〕</sup>〕 无其□□□□□□ □  
 〔<sup>〔存幕〕</sup>〕<sup>〔方角米〕</sup> □□御□□□□□□ □  
 〔<sup>〔存幕〕</sup>〕<sup>〔附大生マ〕</sup> □□  
 (253) × (22) × 4
- (5) 〔<sup>〔律令カ〕</sup>〕<sup>〔九々九八十一〕</sup> □□咄吠啞□□鬼急々如□□ 一十<sup>〔存幕〕</sup> 物忌  
 (100) × (20) × 3  
 (435) × (4) × 5
- (6) 〔<sup>〔存幕〕</sup>〕<sup>〔一人當千〕</sup> □□  
 人形  
 (58) × (21) × 3
- (7) 〔<sup>〔存幕〕</sup>〕<sup>〔鬼の絵〕</sup> □□  
 人形  
 157 × (50) × 6
- (8) 〔<sup>〔咄吠カ〕</sup>〕<sup>〔其地屋入〕</sup> □□  
 人形  
 157 × (50) × 6
- (9) 〔<sup>〔咄吠カ〕</sup>〕<sup>〔符籙〕</sup> □□  
 人形  
 157 × (50) × 6
- (10) 〔<sup>〔咄吠カ〕</sup>〕<sup>〔西〕</sup> □□  
 人形  
 (58) × (21) × 3

補7 (3) 袴狭遺跡

(25)	(24)	(23)	(22)	(21)	(20)(19)
×下田二段	雁□□	中迎	上送	禁制六条八里	×可
戸他人作		春風		二葛	出石
□	□	□月	左	四歩	安道
□					
□				老	
				常貞右田依	
				常	
				×	
				○	
(177) × (44) × 6		径(250) × (110) × 4	径(250) × (75) × 3	(360) × 56 × 3	(510) × 72 × 9

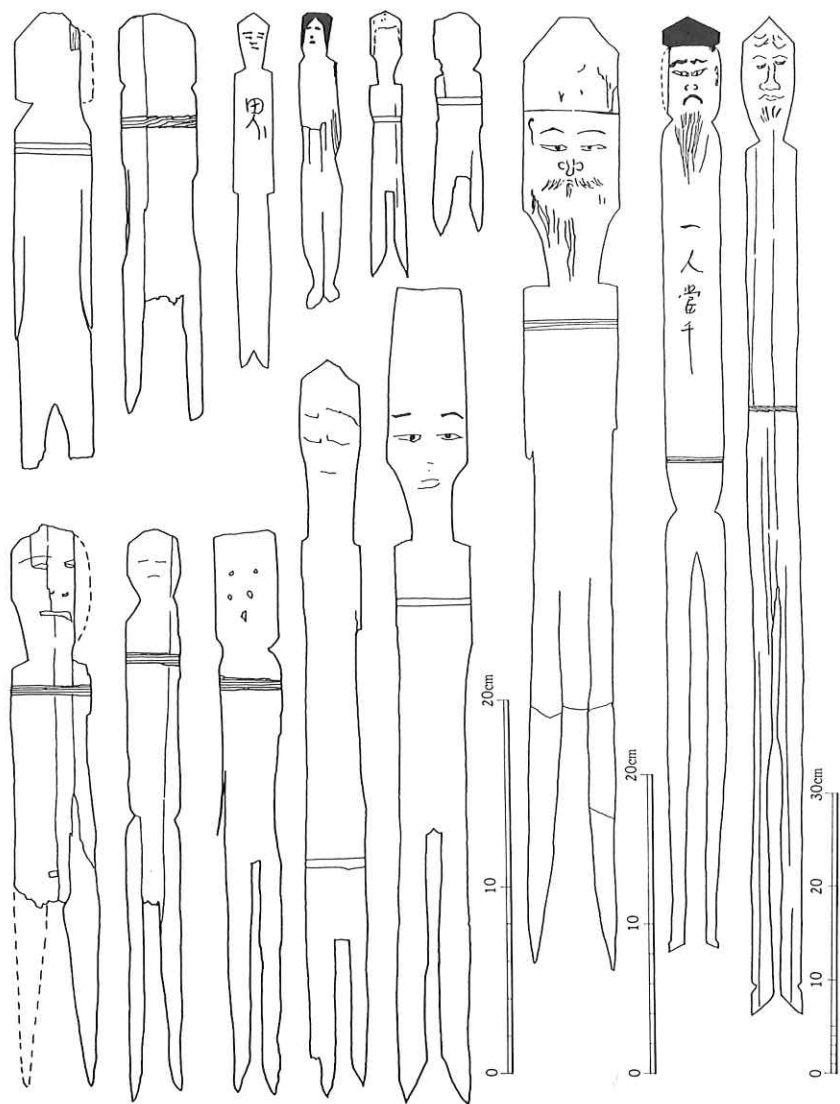


图 23 袴狭遺跡群出土木製祭祀具(人形)

補 7 (3) 袴狹遺跡

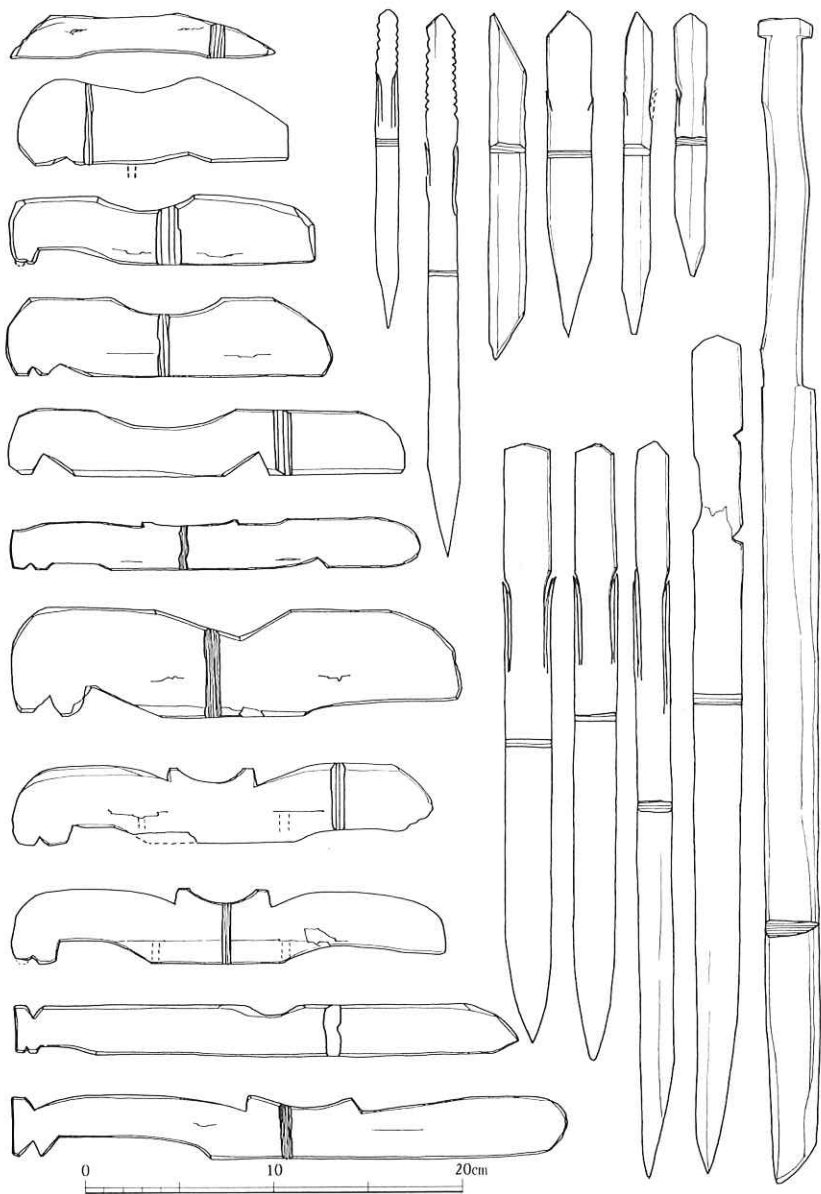


図 24 袴狹遺跡群出土木製祭祀具(馬形、齋串、刀形)

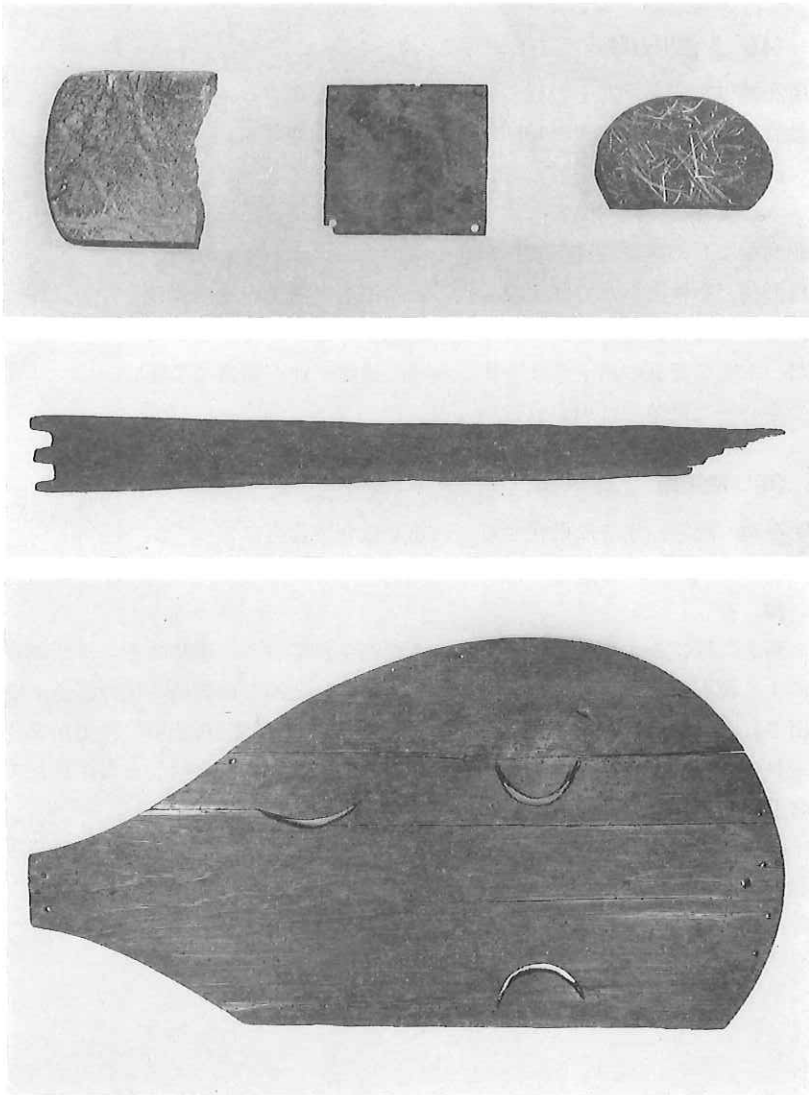


写真 14 (上)ベルト装飾品 (中)木製琴 (下)琵琶腹板

#### (4) 入佐川遺跡

所在地 宮内字坪井その他の入佐川下流域に所在する。兵庫県教育委員会の調査により1989年(平成元)に確認された。

##### 調査

この調査では確認調査により入佐川の旧河床などから木製祭祀具をはじめ農耕具・構造材・古式土師器等が出土した。人形・馬形などを検出したのは平安時代ごろの河道と溝で、宮内側のほ場にまで祭祀遺跡が広がることが確認されたわけである。ただ、木製祭祀具の出土量は全体に前述の遺跡に比べ希薄で祭祀の中心的な遺跡とは思われない。

#### (5) 嶋遺跡

所在地 嶋字法安寺に所在する。兵庫県教育委員会によって、1989年(平成元)に確認された。

##### 調査

南北に延びる水路工事にともなって調査されており、遺跡はトレンチ調査により調査区の北端と南端で見つかっている。北端では古墳時代の河道が検出され、土師器などが多数出土した。また、南端では旧袴狭川の河道が確認され、土器類などと共に木簡1点が出土している。「令給」と書かれたており、その時期は特定できていない。

調査地中央部ではシルト及び粘土の安定した堆積が連続し、遺跡は確認されていない。

(1)  
嶋遺跡出土木簡  
・令給

(167) × 18 × 2

(6) 荒木遺跡

所在地 口小野字荒木に所在し、砂入遺跡の川上に当たる小野川の扇状地上に位置する。海拔 8m 前後。1990年(平成2) 出石町教育委員会により発掘調査された。

調査

地表下約 50~80cm で、約300ほどの柱穴及び土坑と井戸 1 が検出された。柱穴の径は 20cm から大きなものは 1m を超える。遺構は灰色シルト及び灰褐色粗砂をベースとして掘り込まれており、あまり安定している地盤とはいえない。一部北東隅では庄内期併行の土師器を含む茶褐色土をベース面としていた。また、柱穴群東でも弥生時代前期の包含層が検出されている。

遺構

柱穴群は11棟の掘立柱建物と 6 つの堀とにまとめることができる。

建物 1

調査地東北隅に位置する大型建物で南北方向を向く。桁行 5 間(9.5m)・梁行 3 間 (5.6m)。柱間寸法は約 1.85m。柱穴掘り方は一辺 1m を超える方形で、中央に 20cm を少し超える程度の黒褐色土の入った柱抜き取り跡が残る。

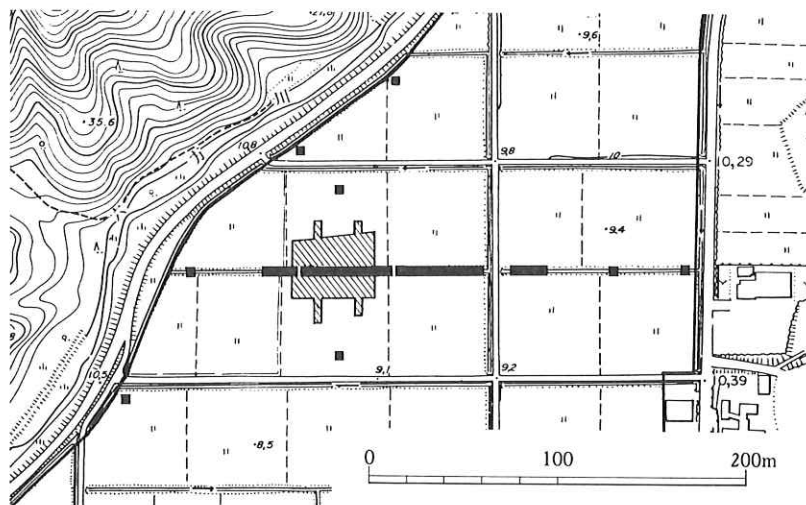
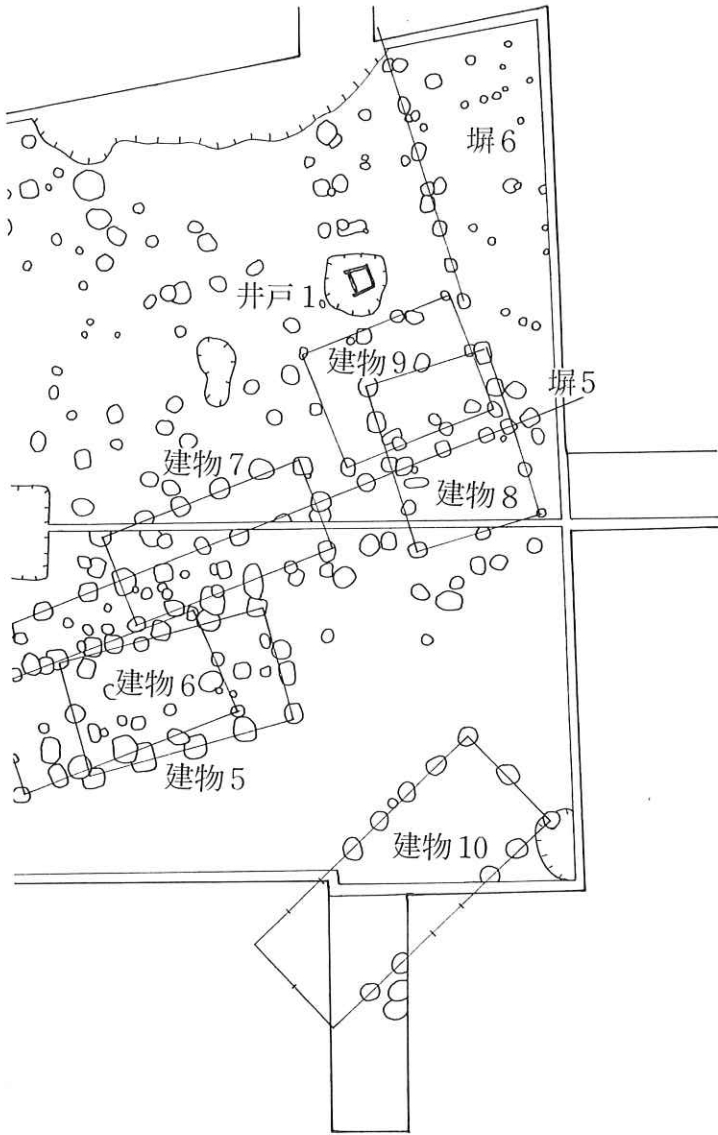


図 25 調査箇所図

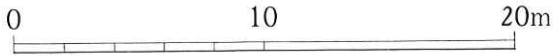


図 26 遺構





配置図



補7 (6) 荒木遺跡

建物2

建物1を東西棟に立て替えたもので新たに間仕切りが見られる。桁行5間(10.3m)・梁行3間(6.2m)。柱間寸法は約2.06mと建物1より広がっている。同じく柱穴掘り方は一辺1mを超える方形で、中央に黄褐粘土の入った柱抜き取り跡が残る。

建物3 調査区から西に延びると考えられる梁行き2間の東西棟。

建物4

調査区南西隅で検出された東西棟。調査区を少し外れているが、桁行5間・梁行3間と推定される。これも柱穴は一辺1mを超える方形の掘り方を持つ。柱間寸法約2.06m。西半に総柱に並ぶ小さな柱穴が検出されており、西側2間分に柵のような施設が付いていたことが推測される。

建物5

建物4に柱筋をそろえて建つ東西棟。桁行4間(8.6m)・梁行2間(4.5m)。柱穴は前述のものに比べてやや小ぶりだが、それでも80cm程度の径をはかる。

建物6

建物5の建て替えと考えられるもので、桁行4間(9.4m)・梁行2間(4.5m)

建物7

同様の東西棟建物。桁行5間(8.3m)・梁行2間(3.8m)。位置から考えて建物6のような建て替えであろうか。

建物8

桁行4間(6.8m)・梁行2間(5.0m)の南北棟。北東隅の柱穴からはほぼ完形の長頸壺が見つかった。

建物9

桁行3間(6.5m)・梁行2間(4.9m)の東西棟。柱穴がやや小さいが、その規模からみて建物8の建て替えの可能性はある。

建物10

南東隅で確認された桁行6間(10.0m)以上・梁行2間(4.8m)の建物。

建物11

3間以上×2間以上の建物。他のものに比べ比較的新しいものと推定される。

## 堀 1

調査地西半を斜行する堀で、大きな柱穴が目ざされる。6間(9.5m)以上。

堀 2 堀 1 に並行して通る。13間 (19.3m) 以上。

堀 3 4間(6.7m)分を検出。建物 1 もしくは 2 の目隠し堀か。

堀 4 3間(4.5m)を検出する。用途不明。

堀 5 調査地を南北に通る堀。15間(29.0m)以上。

堀 6 建物 8 に柱筋をそろえて通る南北堀。6間(9.8m)以上。

## 井戸 1

上面に土坑があり、墨書土器をはじめとして多量の土器が入っていた。掘り方は南北 2.5m、東西 2.4m の不正円形。検出面より 0.7m 下から板材を用いた井戸枠が検出される。長さ 80cm、幅30cm、厚さ 3cm 程度の板を方形に組んでおり、本来この枠板を支えていたと考えられる、2寸角の棒材が 2本枠内から出土した。このほかに径 20cm の小さな曲物と折敷の一部が見つかった。

## 遺構の変遷

建物群はその方位によって大きく 2 期に分けることができる(遺構変遷図参照)。

A 期 北で西に約 15° 振れているもので、建物 1～9 と堀 3・5・6 がこれに当たる。建物 1・2 の大型建物を中心にまとまり、何度かの建て替えを経ながらも長時間利用されていたと考えられる。井戸 1 もこの一群にとまなうものであろう。これらは柱穴から出土した土器より 8 世紀前半を中心とする時期のものと推定され、その配置からみて調査区はその南東の一角をとらえたものと想像される。しかし、すぐ北側には尾根が迫っており、建物群の範囲はせいぜい東西 150m、南北 100m 程度であったろう。

B 期 西に 40° 振れるもので、建物 10 と堀 1・2・4 がこれに当たる。この B 期になると A 期とは配置が一変しており、この地域で大きな改築が行なわれたことを示している。これらの建物はおそらく 9 世紀代に下るものであろう。

補7 (6) 荒木遺跡

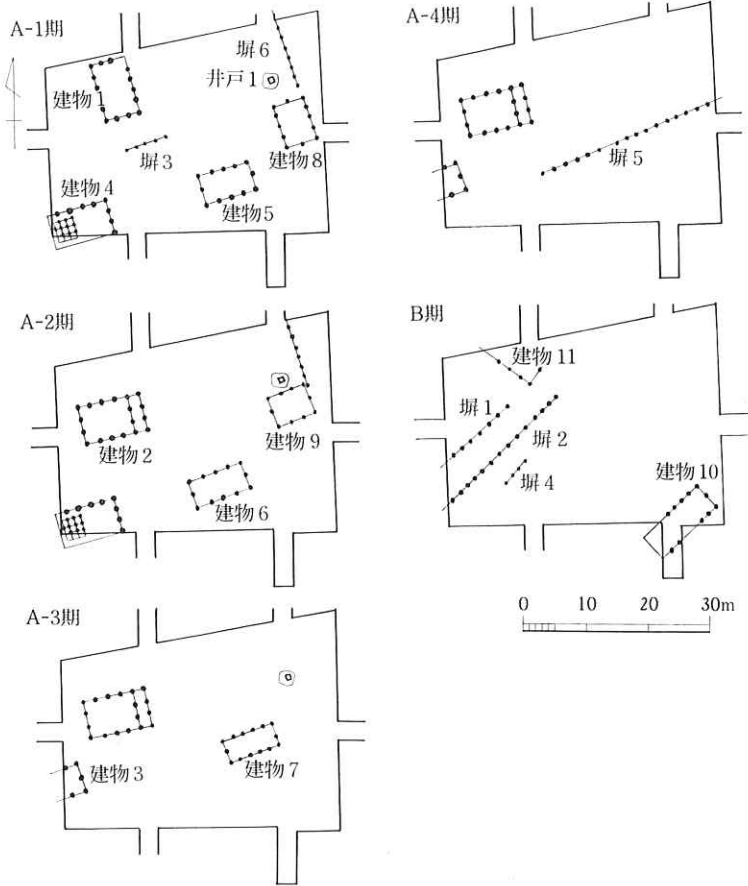


図 27 遺構変遷図(案)

遺物

弥生時代の土器 建物群のすぐ東で弥生時代前期の土器を含む包含層が確認された。土器はコンテナに2箱程度であったが、畿内第I様式の最終段階ごろのもので、これに混じって一点だけ縄文時代末期の長原式と思われる甕の小片も見つかっている。

古墳時代の土器 建物群北西隅から出土した。いわゆる古式土師器と呼ばれる4世紀ごろの土器で壺・甕・器台等が出土している。

奈良時代の土器 柱穴群の上層及び遺構内から出土した。コンテナ40箱分にする。7世紀末から9世紀にわたるもので、いわゆる食器類がよく目につく。緑釉碗・円面硯・竈などといった特殊なものや、「中」「磨呂」と書かれた墨書土器が出土している。

#### まとめ

A・Bの二期に分けられる今回の建物群は、一つの方位を基準に建てられており、方形で大きな柱穴をともなうなど官衙に特徴的な点が見られる。また、出土遺物には硯や墨書土器が出土しており、一般の集落遺跡とは考えがたい。これ程の建物群は但馬では但馬国分寺以外では見つかっておらず、いわゆる地方官衙の一端を探り当てたと考えている。しかし、地方官衙であったとしても、その建物配置は中心的な施設というよりも、なんらかの関連施設を確認したものと見るべきであろう。今後の周辺での調査が待たれる。



写真 15 荒木遺跡全景(西から)

補7 (6) 荒木遺跡

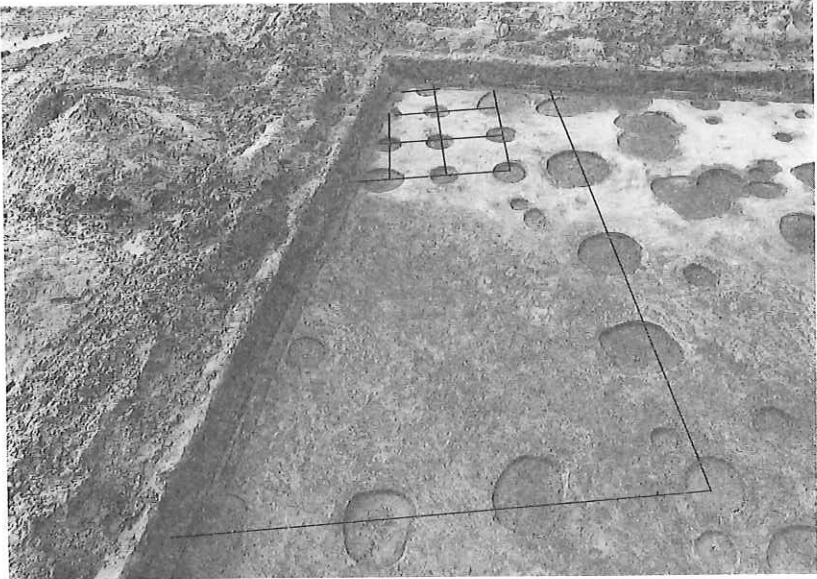
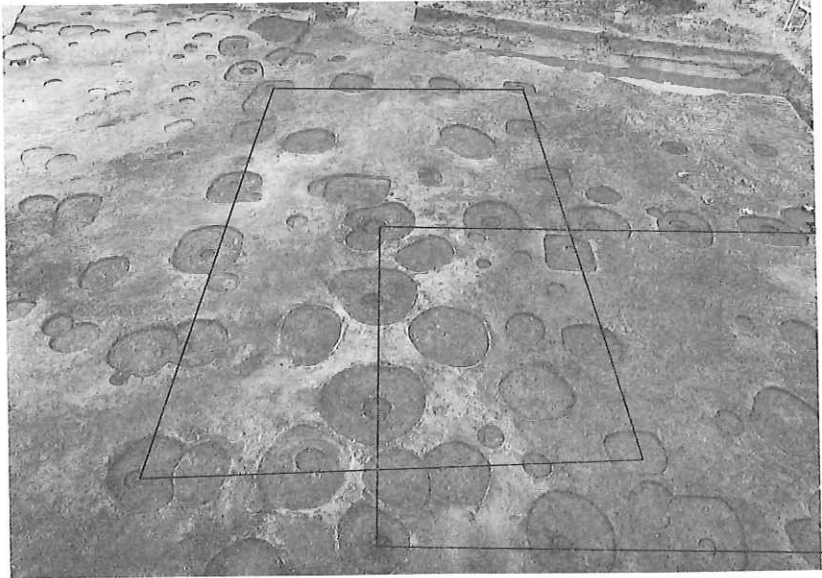


写真 16 (上)右建物 1、左建物 2 (下)建物 4

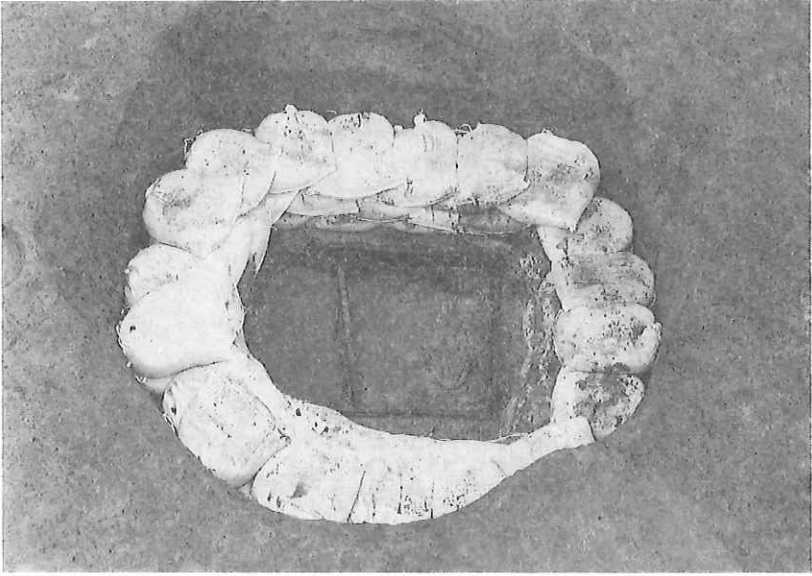


写真 17 (上)井戸1上面遺物出土状況 (下)井戸1

## 補 8 出石城三の丸跡

所在地 出石城は出石町の中心、内町に位置し、現在もこの城を核として城下の町並みが残っている。城の縄張りは、山裾に造られた本丸を中心に二の丸・三の丸が広がり、その回りを



図 28 位置図

内堀と土塁が囲む形となっている。1991年(平成3)、このうち三の丸の一部が出石町教育委員会により発掘調査された。

調査が実施されたのは大手門を城内に入つてすぐ東側の位置で、江戸時代の城下図によると、ここには城主の居宅である「対面所」があったと記されている。

### 調 査

調査はまず 5000m<sup>2</sup> に及ぶ調査対象地内に、トレンチ調査により遺跡全体の状況を把握することから始まった。この結果、江戸時代の遺構が地表下すぐに残っていること、全体にその遺構面が東から西に向かって下がっていることが判明した。現在でも材木町の通りと大手前の通りとでは大手前の通りのほうが約 3m も低く、調査地全体を覆うように建てられていたであろう対面所は少しずつ西に向かって段を作りながら建築されていたようである。また、当地は小学校跡地であり、南半の校舎跡では遺構は破壊されていた。

この後、調査地の東側の部分を調査面積を 2000m<sup>2</sup> まで広げ本格的に調査が開始された。予想どおり対面所跡と考えられる礎石建物跡が確認できた。ただ、遺構面が地表から浅いため、明治以降にかなり壊されており、その合間をぬって礎石が残っているという状態であった。

〈東拡張区〉 建物の礎石及びこの建物にとまなうような石組みの水路や水甕・廁などが検出された。礎石は玄武岩などが用いられ、径 40cm 前後、厚さ 15cm 程度のものが多い。このうちの隣りあう 2 つの礎石の上面中央に十字の傷を見つけることができた。柱を建てる位置を示したものであろう。柱間は 201.5cm であった。建物が大型であり、また調査区南半に東西に長



く建物が建てられていたことは分かるが、礎石のすべてが残っていないので、それぞれの礎石から建物の細部を復元することは困難であった。

調査区北東隅では径 10m ほどの池が検出された。黄灰色の山土を使った三和土で底面や側面が整備されており、その中央には島も造られていた。島には造り替えた形跡があり、最初小さかったものが後で拡張されている。水は東側の石組みの水路から入り、北西の排水路から出ていくようになっている。本来池の周りには石なども配置されていただろう。これ以外にも池の西側には掘建柱の塀が2列確認できた。

〈西拡張区〉 調査地中央あたりには水路や巨大な礎石・井戸などが見つかっている。東半には大きなごみ穴があり、遺跡がかなり壊されていた。しかし、トレンチ調査による西半のあたりは残りが良く、3回にわたる建て直しが確認できた。東西方向に造られた石組みの水路や南北方向に並ぶ礎石列も見つかった。

#### 遺 物

建物の周りやその整地土からはたくさんの遺物が出土した。そのほとんどは陶器や磁器などである。京焼きや丹波焼き・唐津焼き、そして出石焼きなどがある。古いものは桃山時代にまでさかのぼるものもある。ほかには鉄製の鍋や鋤先・古銭などが出土した。古銭には中国の宋の時代に使われていた渡来銭や寛永通宝などがある。瓦も出土したが、対面所が瓦葺きの建物であったはずなのに意外に少量であった。

#### まとめ

今回確認された遺構を文化年間に描かれた絵図面と比べてみる（『出石町史第3巻』付図参照）。池のあるあたりはその当時庭であるものの、この時期には造られていない。これを望む南側の建物のあたりの調査では礎石群が検出されており、建物の配置の様子はよく似ている。また、調査地西に開けた南北方向のトレンチの礎石の並びは広間の南に面する廊下や縁側の礎石ではないかと推測できる。つまり、今回この絵図面のとおりの建物跡は確認できなかったものの、ほぼこれに似た建物配置が確認できたわけで、遺跡の上からこの図面が信頼できることが分かった。また、建物は同時に出土した遺物から19世紀以降のものと考えており、それ以後城が廃城となるまで大きな建て替えはなかったことが分かる。

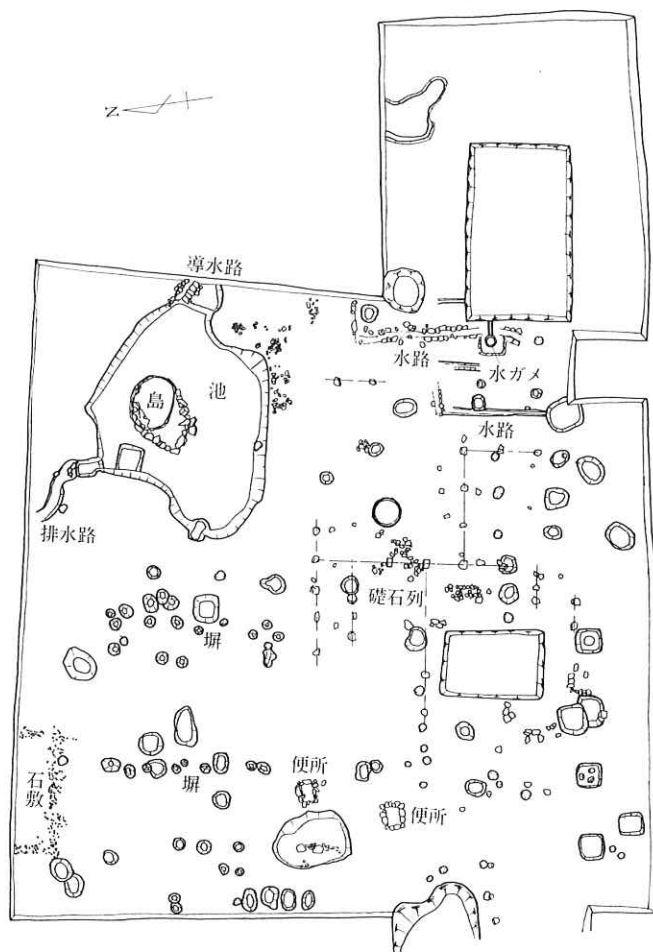


図 29 遺構配置図(東拡張区)

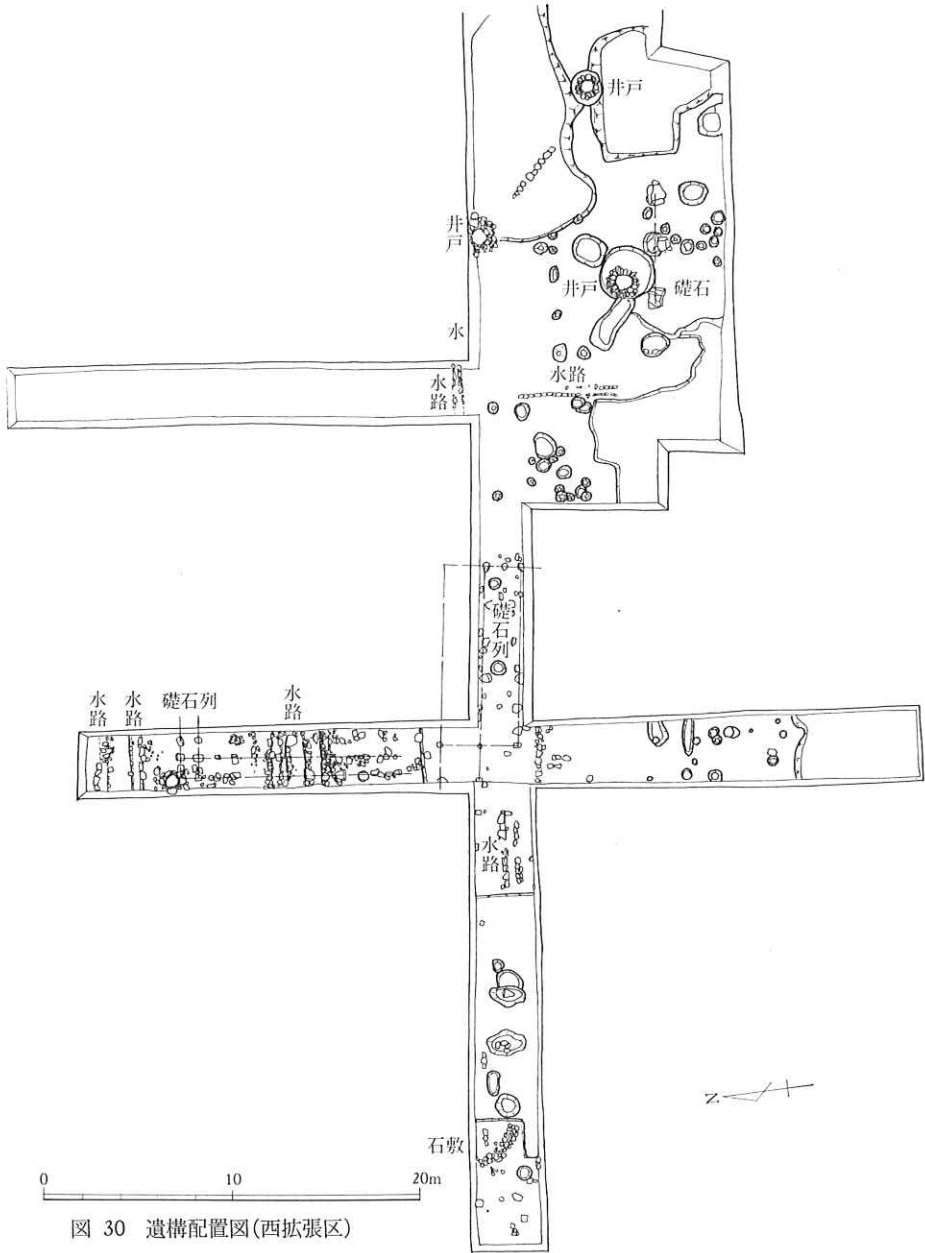


図 30 遺構配置図(西拡張区)

補 8 出石城三の丸跡



写真 18 (上)三の丸発掘調査全景<南西より> (下)同全景 <西から>

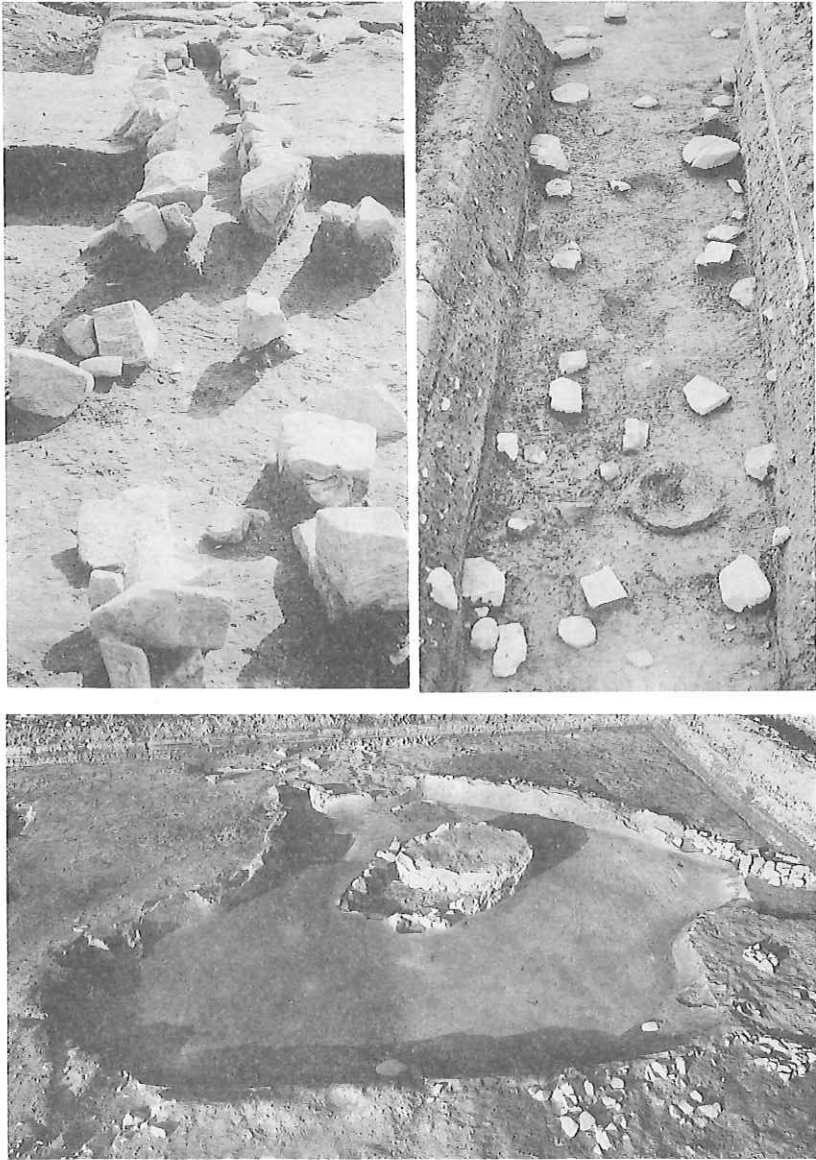


写真 19 (上左)水路 (上右)礎石列 (下)池

補遺(考古編)図・写真・表目次

<b>補 1 田多地引谷墳墓群</b>	<b>補 4 カヤガ谷古墳群</b>
図 1 位置図……………2	図 9 位置図……………17
図 2 遺構配置図……………3	図 10 1号墳玄室内遺物出土状況…18
写真1 (上)田多地引谷墳墓群全景 〈南東から〉……………6	図 11 1号墳石室図……………19
(下)7号墓〈西から〉……………6	図 12 3号墳石室図……………19
写真2 (左上)7号墓第3主体人 骨出土状況……………7	写真6 1号墳全景……………17
(右上)7号墓第3主体蓋石…7	写真7 (上)1号墳石室……………22
(左下)7号墓第3主体出 土五銖銭……………7	(下)同石室内遺物出土状況…22
(右下)5号墓第1主体出 土珠文鏡……………7	写真8 (上)2号墳全景……………23
表 1 田多地引谷墳墓群墓壙一 覧表……………5	(下)3号墳石室……………23
<b>補 2 カヤガ谷墳墓群</b>	<b>補 5 篠谷2号墳</b>
図 3 位置図……………8	図 13 位置図……………24
図 4 遺構配置図……………9	図 14 墳丘平面図……………25
写真3 1号墓全景(北から)……………8	図 15 2号墳石室図……………26
表 2 カヤガ谷墳墓群墓壙一覧表…10	図 16 2号墳墳丘断面図……………26
<b>補 3 入佐山3号墳</b>	写真9 (上)2号墳全景……………27
図 5 位置図……………11	(下)石室内部……………27
図 6 墳丘平面図……………11	写真10 (上)出土玉類……………28
図 7 第1主体遺物出土状況……………12	(下)出土須恵器……………28
図 8 方銘四獣鏡……………13	<b>補 6 カヤガ谷横穴</b>
写真4 (上)第1主体……………15	図 17 位置図……………29
(下)四獣鏡……………15	写真11 (上)横穴群全景……………30
写真5 第1主体遺物出土状況……………16	(下)横穴内遺物出土状況…30
(上)直刀, 四獣鏡	表 3 カヤガ谷横穴遺構及び出 土遺物一覧……………29
(中左)方銘四獣鏡	<b>補 7 袴狭邊跡群</b>
(中右)枕石, 鉄斧, 鉄鎌	図 18 位置図……………31
(下)鉄鏃, 鉄槍	(1) 砂入遺跡
	図 19 調査箇所図……………33
	図 20 第2次調査遺構図及び人 形出土状況……………35
	写真12 木製祭祀具出土状況…36

## 編集後記

一九七七年(昭和五二)四月一日、町史編集室が設置され、その関係人事も整い編集作業が開始された。事務室は当時の町公民館、現在の背田会館に置かれた。以後現在の明治館に落着くまで数度の移転を繰り返した。

元出石愛育園園舎・家老屋敷西端の室・同東端の室、そして明治館である。人事も何度か異動があった。関係担当者の熱意で仕事は休みなく続けられ、出石町史全四巻発行完了の成果が得られた。全四巻の内容を略記すれば次の如くである。

第一巻第一章出石の自然環境・第二章考古学から見た出石・第三章古代の出石・第四章中世の出石・第五章近世の出石・同付図、第二巻第一章幕末維新期の出石・第二章近代社会への歩み・第三章明治後期の出石・第四章大正期の出石・第五章近代出石の教育と文化・第六章昭和前期の出石・第七章戦後の出石・第八

章発展する出石、第三巻(資料編Ⅰ)には生物編・考古編・古代中世編・近世編・同付図、第四巻は幕末維新編・近現代編の二編よりなる。

いささか冗漫にすぎるが、各巻の発行年月日は次の如くである。第一巻発行は一九八四年(昭和五九)三月一日、第二巻は一九九一年(平成三)三月一日、第三巻(資料編Ⅰ)は一九八七年(昭和六二)一月一日に発行、そして第四巻(資料編Ⅱ)は一九九三年(平成五)三月一日に発行した。これで通史編二巻、資料編二巻の計四巻の発行が完了した。我が町予定の修史事業は成功したのである。

本書の完成は我が町の策定によるものであり、多くの人々の協力によるものである。貴重な史資料を提供された人々、その史資料を厳密に処理を下さった先生方に厚くお礼を申し上げます。なかでも監修・執

筆・その他万端にわたり、ご指導をいただいた石田・梅谷両先生に厚くお礼を申し上げる。又、長年にわたり編集の仕事一筋に尽くされた小高・吉谷両氏に深甚の謝意を表す。又、第一巻より第四巻の完成まで誠実な仕事で印刷・製本・納本された河北印刷株式会社へ謝辞を述べる。

本町関係の史資料は大量である。これを蒐集整理して滅失を防ぎ、学習に資したい。その為には完備された史料館の建設を急がなければならない。

新しい世紀を迎えようとする今、世界の体制が革命的变化を遂げようとするとき、出石町史が完成したことの意義を明晰に把握しなければならない。我々は新しく美しい町史をつくらなければならない。

編集関係者

出石町史編集委員会

会長 廣井 實

副会長 長尾 家次

委員 石田 善人

〃 梅谷 光信

〃 岡本 久彦

町史編集担当者

小高 与志美

吉谷 礼子

発行関係者

総務課

課長 中山 勲

参事 芦田 和美

財政係長 山下 康雄

庶務係長 小林 誠



監修者・執筆者一覽

監修(幕末維新編)	石田善人	岡山大学名誉教授・神戸女子大学教授
監修(近現代編・付録・補遺)	梅谷光信	弁護士・但馬史研究会会長
幕末維新編	宿南保	元八鹿町立青溪中学校教諭
近現代編(一章)	寺尾庄八郎	兵庫県文書課県史編集担当参事
近現代編(二章、三章一節、付録五)	梅谷光信	弁護士・但馬史研究会会長
近現代編(四章)	岡本久彦	元出石高等学校教諭
近現代編(五章)	廣井實	出石町史編集委員会会長
近現代編(三章二節、六章一節、二節一項)	滑川良雄	元兵庫県参事・元県立歴史博物館次長
近現代編(六章二節二項、付録三・四)	長尾家次	出石町史編集委員会副会長
補遺	小寺誠	出石町教育委員会社会教育課主任

---

出石町史 第四卷 (資料編Ⅱ)

平成5年3月1日発行

編集 出石町史編集委員会

発行 出石町

印刷・製本 河北印刷株式会社

京都市南区唐橋門脇町28

---

